山口大学大学院東アジア研究科

博士論文

『大江千里集』に関する研究

令和７年３月

邵　楠

目　次

序章 1

1. 大江千里と『大江千里集』 2

2. 『大江千里集』に関する先行研究とその問題点 5

3. 本研究の目的・対象・方法 10

4、本論文の構成 12

第一章 『大江千里集』の成立意図―序文を端緒として― 14

1. はじめに 15

2. 「古今」―編纂の契機 16

2.1「古今」という語に関する従来の解釈 16

2.2『大江千里集』が誕生した当時の宇多朝の歌壇 19

2.3 文人としての千里 23

3. 「餘孽」―撰者の状況 24

3.1「餘孽」という語の初出と用例 24

3.2 大江家の一族と昇進を望む千里 27

4. 終わりに 33

第二章 『大江千里集』の述懐部に関する考察―その主題をめぐって― 35

1. はじめに 36

2. 『千里集』における「述懐部」の主題 38

3. 述懐歌の句題に対する乖離 57

4. 終わりに 59

第三章　『大江千里集』の「詠懐部」に関する考察―その表現手法に着目して―... 61

1. はじめに 62

2. 『千里集』における「詠懐部」の表現手法 63

3. 公的な場や召歌における不遇の表出 69

4. 終わりに 71

第四章　『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法 73

1. はじめに 74

2. 九十二番の和歌と句題との比較 77

3. 九十二番歌と血涙が袖を濡らすという表現を用いる日本の従来の詩歌 84

4. 終わりに 90

終　章 93

参考文献 100

序章

１.大江千里と『大江千里集』

『大江千里集』は大江千里の私家集である。大江千里は儒家学者大江音人の息子で、生没年は不明である。儒門の大江家に生まれながら、大江千里は九世紀末から十世紀初めにかけて歌人として活躍していた。中古三十六歌仙の一人である。八代集では、大江千里の歌は『古今和歌集』に十首、『後撰和歌集』に二首、『新古今和歌集』に三首が見える[1]。大江千里は歌人であると同時に官僚でもある。彼の官歴について、諸書では次のような記事を載せている。

・『古今和歌集目録』: 参議音人卿男。大学々生也。延喜元年三月十五日任中務少丞。陽成院御給。二年二月廿三日任兵部少丞。三年三月廿六日轉大丞[2]。

・『尊卑分脈』: 兵部大丞、歌人古今巳下作者[3]。

・『大江氏系図』: 千里、伊豫守正五位兵部大丞、歌人[4]。

・『中古歌仙三十六人伝』: 備中守本主孫。参議右衛門督音人男。或説音人孫。右京大夫玉淵男云云。元慶七年十一月十一日任備中大丞。延喜元年三月十五日任中務少丞。二年二月廿三日任兵部少丞。三年二月廿六日轉大丞[5]。

上記の官歴から見れば、大江千里の極官は兵部大丞であり、彼の文学史上の名声と

---

[1] 金子彦二郎（『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇（増補版）』（培風館、1955 年 6 月、165 頁）

[2] 藤原仲実『古今和歌集目録』（『群書類従』第十六輯・和歌部、続群書類従完成会、1934 年 4 月、131 頁）

[3] 黒板勝美『新訂増補国史大系第六十巻下　尊卑分脈　第四篇』（吉川弘文館、1967 年 1 月、92 頁）

[4] 『大江氏系図』（『続群書類従』第七輯下・系図部）の「千里」の項。

[5] 藤原範兼『中古歌仙三十六人伝』（『群書類従』第五輯・伝部、続群書類従完成会、1932 年 10 月、388 頁）

比べると、官職としては不遇であった人物と言える。

寛平六年（894 年)、宇多天皇は大江千里に歌集の献上を命じた。大江千里はその勅命に対する答えとして『大江千里集』を編纂し、献上した。千里が新たに歌集を作成するにあたり、漢詩の一節を句題として和歌を詠むという作歌方法を取った。これはいわゆる句題和歌というもので、やがて詠法の一つともなる[6]。それゆえ、『大江千里集』は句題和歌の先蹤と位置づけられている[7]。当該歌集の書名は、群書類従本では「句題和歌」であり、『私家集伝本書目』では「大江千里句題和歌」、「大江千里句題和歌集」とされる。「大江千里集」は伝寂蓮筆本（伝本の一つであり、後述する）などで用いられている[8]。これらの命名は、いずれも大江千里が自分で命名したものではなく、伝写する段階で後人によって新たに付けられたものである。現在、よく使われている名称は「大江千里集」と「句題和歌」である。但し、「句題和歌」という呼び方は、例えば『和歌文学大辞典』に「句題和歌とは、狭義には既存の漢詩の一句ないしは複数句を題として詠む漢詩句題和歌を指す[9]」とあるように、和歌の詠法を表す際にも用いられる。なお、大江千里の後、定家や慈円も句題和歌を詠んでいる[10]。江戸時代になる

---

[6]「句題和歌」という用語について、『日本古典文学大辞典』には、「句題和歌とは、一般に漢詩の一句を取って和歌に翻案改作したものをいう。平安時代詩会において句題の題詠が行われたが、寛平年間になると一歩を進めて句題により和歌を詠ずるようになった。これは漢詩文の表現や思想を和歌の上に表現し、和歌の世界に新境地を開拓しようとしたもので、その先鞭をつけたのが本作（大江千里集）である」とある（大曽根章介『日本古典文学大辞典』(岩波書店、1984 年 1 月、288 頁)。

[7] 島津忠夫、井上宗雄、有吉保、片桐洋一、久保田淳監修『和歌文学大辞典』(『和歌文学大辞典』編集委員会、2014 年 12 月、293 頁)

[8] 小沢正夫『古今集の世界　増補版』(塙書房、1976 年 5 月、305 頁)

[9] 前掲注 7 書

[10] 千里と同様に中世の定家や慈円も白居易の詩を句題として歌を詠んだ。彼らの歌と『大江千里集』との違いについて、金子彦二郎氏は、「句題選擇の形態からは、千里が七言・五言の各一句のみを採用してゐるのに對して、慈鎭（円）等の歌の句題には、單句よりは寧ろ一聯づつの採用の方が大多数を占め、往々數聯にも及ぶものさへある」と説く（前掲注 1 書 365～366 頁)。また、句題に対する摂取態度について、田中幹子氏は「それ以前の文学（『大江千里集』も含め）は『白氏文集』に学び、吸収するという姿勢であったに対して、慈円のそれは漢詩に和するといういわば互角の姿勢で臨んでいる。よって作られた和歌は、漢詩句をどこまでも契機として、あくまで自己の感情の発露として詠まれている。対して、専門歌人としての誇りを持つ定家は、漢詩句題を結題の手法で詠み、己れの感情をださず、物語的色彩を込めた芸術作品として作り上げた」と説く（「新古今歌人による『白氏文集』受容―『文集百首』から―」、『危機と文化：札幌

と、賀茂真淵と上田秋成の作品にも句題和歌が見える。無用の混乱を避けるために、本論文では「大江千里集」という名称を用いることにし、以下『千里集』と略する。但し、引用した先行研究に「句題和歌」と書いてあれば、それに関連する文脈ではそれを踏襲する。

『千里集』は成立年代が古く、また、撰進後間もなく本文の混乱が発生したと類推される。現存する諸伝本はいずれも本文混乱の後、修復という過程を経て現れたものであり、現在のところ異本系統、流布本系統に二大別されている。両系統の代表的伝本は、異本系統が書陵部本、流布本系が伝寂蓮筆本と考えられてきた[11]。本論文に挙げる『千里集』のテキストは流布本系の伝寂蓮筆本に拠った。但し、意味不通や不審な箇所がある場合は異本系の書陵部本、平野由紀子・千里集輪読会編『千里集全釈』（風間書房、2007 年 2 月）を随時参照した[12]。

大学文化学部文化学会紀要』第 9 号、2007 年 4 月）。

[11] 蔵中さやか『題詠に関する本文の研究』（おうふう、2001 年 1 月、31 頁）

[12] 書陵部本と伝寂蓮筆本と底本としての優位性などの問題について、早くは金子彦二郎氏が、「句題に就いて言へば、其の最も完備せるものが圖書寮御本大江千里集で、且つ其の記載の概ね正確妥當な點から觀ても、比率が最も多い」と指摘し、句題の完備性から書陵部本を最善本と判断された（『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇（増補版）』（培風館、1955 年 6 月、280 頁）。それ以降、長い間、書陵部本が底本としての優位性は認められていた。例えば、山岸徳平『和歌文学研究 山岸徳平著作集 II』（有精堂、1971 年 11 月）、柳川順子「『大江千里集』句題校勘記」（『広島女子大学国際文化学部紀要』第 12 号、2004 年 2 月）などがある。また、『新編国歌大観』も書陵部本を底本としている。対して、書陵部本を善本とする説に異を唱える論も見られる。橋本不美男氏は書陵部本全体について、「句題が整序されているからといって、伝存系路が明らかではない」ため、「書陵部本を、最善本とすることは危険」であると説く（橋本不美男『王朝和歌:資料と論考』笠間書院、1992 年 8 月、459 頁）。また、蔵中さやか氏も「『千里集』という集内部における構成から、伝寂蓮筆本が原態を留めるもの」であるという（蔵中さやか「現存二系統本成立に関する一試論」『題詠に関する本文の研究』おうふう、2000 年 1 月、52～56 頁）。現在、『千里集』の研究は概ね流布本系の伝寂蓮本を底本するようになる。例えば、『千里集』に注釈を行う注釈書『千里集全釈』（平野由紀子・千里集輪読会、風間書房、2007 年 2 月）や「釈論大江千里集（一）～（十二）」（小池博明、半沢幹一『長野工業高等専門学校紀要』51 号、2017 年 6 月、及び『共立女子大学文芸学部紀要』65 号、2019 年 3 月より連載中）など

現存の伝寂蓮筆本によれば、『千里集』は全百二十五首の歌を収めているが、そのうち、五首は後人によって書き入れられたものであり、千里が献上した本には含まれていなかったと指摘される[13]。歌集には、春（21 首）、夏（12 首）、秋（22 首）、冬（12 首）、風月（11 首）、遊覧（13 首）、離別[14]（12 首）、述懐（12 首）、詠懐（10 首）という九つの部立てを設けている。そのうち、歌集の末尾にある詠懐部の歌は句題を伴っておらず、他の百十五首が句題和歌として詠まれている。句題として用いられている出典漢詩は、白居易の詩が主であり、七十四句ある、他に元稹が十句、『初学記』から二句、出典不明のものが二十九句ある[15]。

以上は、大江千里という人物の略歴と、『千里集』という作品の成立及び構成である。次節では、『千里集』に関してどのような研究が行われてきたかを整理し、近年の研究動向や問題点を述べていく。

２．『大江千里集』に関する先行研究とその問題点

『千里集』に関する研究は、大きく二つの流れに分けられる。一つは、『千里集』における和歌と句題との関係、即ち『千里集』の作歌方法に関する研究であり、もう一つは、『千里集』に込められた千里の意図に関する研究である。

まずは、『千里集』の作歌方法に関する先行研究について触れておきたい。『千里集』に関する初期研究として、金子彦二郎氏の研究が挙げられる。金子氏は『千里集』に

は、いずれも、流布本系の伝寂蓮本を底本とする。そこで、本論文に取り上げるテキストも基本的に流布本系の伝寂蓮本に拠ることにする。但し、意味不通や不審な箇所がある場合は異本系の書陵部本を随時参照した。

[13] 平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、2007 年 2 月、14 頁）

[14] 当該部立ての名称は、伝寂蓮本には「雑部」とするが、金子彦二郎氏によれば、これは誤讀・誤記した結果である。「離別」とあるを以て正しきものである。（金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇（増補版）』、培風館、1956 年 3 月、231 頁）

[15] 平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、2007 年 2 月、8 頁）

おける和歌を句題と比較し、その歌を「原詩句を直訳せるもの」、「原詩句直訳に増義を施せるもの」、「原詩句の巧に摂取醇化せられしもの」という三種に分類している。そして、『千里集』の和歌は「未だ以て稚拙生硬の域を脱しきれぬ」と全体的な評価を下している。にもかかわらず、金子氏は、『千里集』は「海外文学の攝取醇化の理念の上に立脚せる新體和歌―或は異風體和歌」として、和歌史上の意義を肯定すべきであると説く[16]。同様に、山岸徳平氏は『千里集』について、「異色ある方面を開拓したものであり、その功は、没する事が出来ないと言はねばならない。只、当時の作品としては、まだ十分に芸術的な作品とならずに、直訳的になったり、その為に詩趣が乏しくなったり」すると述べる[17]。吉川栄治氏も同様な評価をし、「古句を引き写ししたに過ぎない千里の歌は、詩に対して従属的な位置に甘んじているものと言わねばならない。そこには歌独自の創造はみられず、あるのは優美典麗な佳句の世界である」と述べる[18]。また、蔵中さやか氏も直訳の観点から、『千里集』は、「句題を超越することのない範囲で和歌を詠む。あくまでも、同じ情景を和漢両様の方法で表現することが目標」であると指摘する[19]。同様に、本間洋一氏は、平安朝から中世までの句題和歌の史的展開を辿るに当たって、『千里集』の歌について、「詩句に即応した直訳調のものが殆どで、和歌は詩句に従属するものであった」という評価をする[20]。川村晃生氏も、『千里集』の歌は「句題の翻案歌的傾向を有する」と評する[21]。また、太田善之氏も、『千里集』は「漢詩句そのものの詠歌をし、漢詩句を内在する和歌を「新歌」の形式

---

[16] 前掲注 1、396 頁

[17] 山岸徳平『和歌文学研究　山岸徳平著作集 II』（有精堂、1971 年 11 月、152～153 頁）

[18] 吉川栄治「大江千里集小考―句題和歌の成立をめぐって」（『国文学研究』第 66 号、1978 年 10 月）

[19] 蔵中さやか「『大江千里集』の歌風」（『甲南女子大学大学院論叢』第 11 号、1989 年 11 月）

[20] 本間洋一「句題和歌の世界」（『和歌文学の世界　第 15 集　論集〈題〉の和歌空間』、笠間書院、1992 年 11 月）

[21] 川村晃生「句題和歌と白氏文集」（『白居易研究講座　第三巻　日本における受容（韻文篇）』、勉誠社 1993 年 10 月）

として立ち表した」と説く[22]。

一方で、意訳の観点から、『千里集』の作歌方法を捉える論も見られる。例えば、佐山済氏は、千里の和歌は、「やはり、詩句をヒントにした一つの独立した歌としてみるべきであ」ると説く[23]。この佐山氏と同様の指摘が津田潔氏にもあり、即ち、津田氏は、『千里集』における句題と和歌の関係について、「如何に表現すれば新たな和歌文学として成立し得るのかという点を追求する」ものであるとし、また、「詩句をそのまま素直に訓み下そうとしているのではなく、あくまでそれを解釈して詠んでいる」という見解を示す[24]。関連して、半沢幹一氏は「『句題和歌』の和歌が句題に従属し、その表現が類型的である」にもかかわらず、「一首の和歌とするには、字数や音数律にとどまらず、一つの作品としての内容・表現のまとまりにまで、配慮・工夫を及ぼさなければならない」という千里の詠歌態度を指摘する[25]。そして、歌を一つの完結した作品として捉えるべく、『「句題和歌」の漢和＜接触＞ノート』[26]や、「釈論大江千里集」[27]を刊行してきた。また、平野由紀子・千里集輪読会による『千里集全釈』[28]は、句題として引かれた詩句の出典となった原拠詩全体を示し、句題の意味を解説しつつ、各歌に逐語訳を施しており、漢詩句題から和歌に至る過程を提示する。

さて、ここまで見てきたような直訳、意訳の観点から『千里集』の作歌方法を見ている諸論に対して、近年では、能登敦子氏が『千里集』における一首の歌を取り上げ

---

[22] 太田善之「『大江千里集』の歌学」(『学芸国語国文学』第 32 号、2000 年 3 月)
[23] 佐山済「古代の和歌と漢詩」(岩波講座『日本文学史』第三巻　古代、岩波書店、1959 年 6 月、17 頁)
[24] 津田潔「『大江千里集』に於ける白詩の受容について」(『國學院雑誌』第 80 巻第 2 号、1979 年 2 月)
[25] 半沢幹一「『句題和歌』における和歌―その評価の見直しのために」(『伝統と変容』ぺりかん社、2000 年 6 月)
[26] 半沢幹一『「句題和歌」の漢和＜接触＞ノート』(共立女子大学総合文化研究所、2005 年 2 月)
[27] 小池博明、半沢幹一「釈論大江千里集（一）～（十二)」(『長野工業高等専門学校紀要』51 号、2017 年 6 月、及び『共立女子大学文芸学部紀要』65 号、2019 年 3 月から連載され、現在秋・四十九番まで進行している)
[28] 平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』(風間書房、2007 年 2 月)

て、その作歌方法について、新しい見解を提出している。能登氏は「『千里集』は、句題和歌の形式を採りながら、実際の歌作にあたっては、句題以外の詩文（白居易や菅原道真の漢詩文など）をも利用する」と指摘し、九世紀当時の和漢交渉の有り様を歌作に記し留めている点で、『千里集』の評価は揺るがないと説く[29]。九世紀当時の和漢交渉という視点から、『千里集』の作歌方法を評価する上での新しい一側面を開拓していると言える。

以上は『千里集』の作歌方法を考察する先行研究となる。これまでの研究からすれば、『千里集』は句題和歌の先蹤として、和歌の世界に異色の分野を開拓する点で、評価されるものであった。そして、その作歌方法自体については、初期の「稚拙生硬」、句題を「直訳」するという消極的な評価から、句題を意訳するという積極的な評価に変転してきた。しかし、どちらかといえば、『千里集』の歌は全体的に句題を翻訳する傾向にあることは否定できず、それが定説ともなってきた。但し、近年では、従来の「句題の翻訳」説にとどまるのではなく、九世紀当時の和漢交渉という視点から、『千里集』の作歌方法を捉えなおすという新しい研究動向が現れてきている。論者の立場も、このような近年の動向と歩調を合わせるものとしてある（次節にて詳述）。

次に、『千里集』に込められた千里の意図[30]に関する先行研究について述べていく。山口博氏は『千里集』の背景に千里の不遇意識があることを提示し、『千里集』が献上された寛平六年以前、千里は「事件に連坐して謫居」していたこと、そして、寛平六年になっても官位が散位従六位上にとどまったことなどを踏まえ、千里は詠懐歌十首

[29] 能登敦子「『大江千里集』の方法」（『和漢比較文学』第 46 号、2011 年 2 月）

[30] ここで、「意図」という語の定義について説明しておきたい、後掲の注 33 論の題目や注 34 論の引用文に示されているように、『千里集』に込められた千里の「意図」とは、概ね『大江千里集』を編纂するにあたって、千里の中にあった動機を指す。本研究で用いる「意図」という語も先行研究と同様であり、編纂の動機を指す。

に我が身の不遇を訴える意を込めたと指摘する[31]。小野泰央氏は山口博氏の説を踏まえて、詠懐歌に千里の不遇を天皇に訴える意が込められていることを認めた上で、漢詩文表現も有すると指摘する。そして、「漢文は官人の文章である」としつつ、千里は「詠懐部」で漢詩文表現を用いるのは、官人としての「不遇感を奏上するという切迫した状況下にあったが故」であると推測する[32]。また、柳川順子氏は、「千里の『句題和歌』には句題をそのまま翻訳したようなものが圧倒的に多いが、しかし、原拠詩からかなり外れる歌も一方的には確かに存在する」としつつ、「千里詠の原拠詩からの乖離は、彼の不遇を訴えることに発している」という見解を示す[33]。小山順子氏は「千里の意図としては、和漢の結び付きを可視化することで、漢から和への転換の妙を見せるということである」とする[34]。

以上、『千里集』における千里の意図についての諸論は、基本的に千里の官位の不遇に基づいて『千里集』を分析し、そこに込められた千里の個人的な意図を考察したものとなる。換言すれば、千里の個人的な意図は彼の官位の不遇と『千里集」の内部という両者の間に限定して論じられてきた傾向があると言える。論者も、千里の官位の不遇という視点が不可欠であると考える。本研究もそれを参照しつつ、『千里集』を分析し、そこに込められた千里の個人的な意図を考察することになる。但し、『千里集』はあくまでも勅命を受けて、公的に編纂、献上された歌集である。したがって、千里の個人的な意図を考察する際に、官位の不遇などのような撰者自身の状況の他に、編纂の契機、時代状況などといった作品の外部に目を向けることも必要であろう。

---

[31] 山口博「人の事につき籠居」(『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』、桜楓社、1973 年 1 月)

[32] 小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」(『和歌文学研究』第 76 号、1998 年 6 月)。

[33] 柳川順子「大江千里における「句題和歌」制作の意図」(『広島女子大学国際文化学部紀要』第 13 号、2005 年 2 月)

[34] 小山順子「漢詩文の受容と和歌独自の創造的機能―『大江千里集』所載句題和歌の享受から―」(錦仁編『中世文学と隣接諸学 6 中世詩歌の本質と連関』、竹林舎、2012 年 4 月)

3. 本研究の目的・対象・方法

さて、前節までに見てきたような先行研究の問題点や新しい研究動向を踏まえて、本研究においても『千里集』に込められた千里の個人的な意図、と『千里集』の作歌方法という二つの課題に取り組みたいと考えている。本節では、本研究の対象、研究方法について具体的に述べていく。

本研究では『千里集』の序文、「述懐部」、「詠懐部」を主な研究対象とし、テキストに依拠した分析を行いつつ、そこに編纂の契機、撰者自身の身辺的な状況、あるいは時代状況といった、いわば作品外部に対する視点を導入することによって、『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察する。また、『千里集』の作歌方法の考察では、『千里集』の九十二番歌に注目する。当該歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘しつつ、その作歌方法の具体化を試みる。各課題の具体的な研究方法は次の通りとなる。

１、『千里集』の序文について

『千里集』の序文は、当該歌集が献上された当時、千里自身が書いたものである。そこでは、当該歌集の成立の背景を伝えており、編纂の契機や撰者の状況についての言及が見られる。本研究では、『千里集』の序文を分析し、特に序文において当該歌集の編纂の契機や撰者の状況について言及する言葉を端緒として、『千里集』の成立意図について検討を行う。

2、「述懐部」と「詠懐部」について

『千里集』の「述懐部」には歌が十二首あり、句題がある。「詠懐部」には歌が十首あり、句題を伴わない。部立ての名称からすると、「述懐」と「詠懐」はともに「自分

の思ひをのべる。所懐をのべる[35]」という意である。果たして、千里はこの二つの部立てでいかなる「所懐」を詠むのか。従来の『千里集』の研究では、「詠懐部」については、先行研究が積み重ねられており、主題上、集中的に不遇が詠まれていること、及び、漢詩文表現を有することが指摘されている。それに対して、「述懐部」については、あまり注目されてこなかった。「述懐部」を中心とする論は管見の及ぶ限り、皆無である。また、「述懐部」に言及する論があったとしても、それらの論では、「詠懐部」の不遇詠と一括にして論じられる傾向にある。論者は、「詠懐部」の歌が不遇詠であることについて先行研究と同様の立場であるが、「述懐部」の歌は「詠懐部」と同様に不遇詠として把握されてきたことについては、見解を異にしている。

したがって、こういった先行研究の状況に対して、本研究では、「述懐部」に収められる和歌と句題を分析して、そこに詠まれる千里の「所懐」を考察する。また、その過程で、句題から乖離する歌に着目し、その乖離の背景にはどのような時代状況や、それを踏まえた千里の意図が働いているのかについて検討する。

また、「詠懐部」については、前に触れたように、従来の研究では、主題上、集中的に不遇を詠む。そして、漢詩文表現を有すると指摘されてきた。これらの見解について、論者も同様の立場であるが、本研究で着目したいのは、「詠懐部」に詠まれる不遇は、概ね事物を介するかたちで導かれているという点である。果たして、千里はなぜこういった間接的、婉曲的な表現手法を用いて、不遇を述べるのか。本研究では、その表現手法には千里のどのような意図が働いているのかについて、当時の時代状況を踏まえつつ検討する。

以上は、『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察するにあたり、本研究の具体的な方法となる。

---

[35] 諸橋轍次(著者)、鎌田正・米山寅太郎（修訂増補）『大漢和辞典』巻十一（大修館書店、2001年12月、23頁）

次に、『千里集』の作歌方法についての考察では、本研究で注目するのは『千里集』の九十二番歌である。九十二番の句題と和歌は次の通りとなる。

句題：涙霑雙袖血成文
和歌：なくなみだ　こふるたもとに　かかりては　くれなゐふかき　あやとこそみれ

―『大江千里集』　離別　九十二番

当該歌の句題は涙が袖を濡らすという表現を用いる。中国の漢詩において、涙は「衣・裳・衿・巾」をぬらすという事例が多く見られるが、「袖」を濡らすという例は極めて少ない[36]。しかし、日本の詩歌では、涙が「袖」を濡らすという表現が散見される。本研究では、九十二番の和歌を句題と比較して、涙が「袖」を濡らすといった表現に着目しながら両者（和歌と句題）の関係を明らかにする。そして、この和歌と句題の関係は日本の従来の詩歌とどのようなつながりがあるのかについて検討する。そこから、歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘し、『千里集』の作歌方法について見解を提示する。

4、本論文の構成

本論文は四章より成る。第一章、第二章、第三章は『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察するものである。第四章は『千里集』の作歌方法を考察するものである。以下に、各章の概要を述べる。

第一章では、『千里集』の来歴を伝える序文に注目し、特に、編纂の契機や撰者である大江千里の状況について言及した「古今」と「餘孽」という言葉に着目する。そし

[36] 神谷かをる「『涙』のイメジャリ―万葉集から古今集へ―」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　十三』、和泉書院、1993 年 7 月、137 頁）

て、この二つのキーワードを切り口として、『千里集』の成立意図の検討を行う。

第二章では、「述懐部」に収められた和歌と句題を分析し、そこに詠まれる千里の「所懐」を考察する。また、その過程で、句題から乖離する歌に着目し、その乖離の背景にはどのような時代状況や、それを踏まえた千里の意図が働いているのかについて検討する。

第三章では、「詠懐部」に収められた歌の表現手法を分析し、そして、その表現手法には千里のどのような意図が働いているのかについて、当時の時代状況を踏まえつつ検討する。

第四章では、『千里集』における九十二番歌に注目し、その和歌を句題と比較して、両者の関係を明らかにする。そして、この和歌と句題の関係は日本の従来の詩歌とどのようなつながりがあるのかについて検討する。そこから、歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘し、『千里集』の作歌方法について見解を提示する。

本研究では以上の四章において本論部分を展開する。

第一章

『大江千里集』の成立意図―序文を端緒として―

1. はじめに

寛平六年（894)、大江千里が宇多天皇の勅命を受け、和歌集を編纂した。千里が新たに歌集を作成するにあたり、漢詩の一節を句題として和歌を詠むという作歌方法を取った。こうして句題和歌の濫觴である『大江千里集』が誕生した。宇多天皇の勅命に対する答えとして献上された当該歌集には大江千里の個人的な思いが込められていると指摘されている。

従来の研究では、『千里集』に込められる意図について、千里の不遇を天皇に訴えるものであったという見解が主流である。例えば、山口博氏は『千里集』の背景に千里の不遇意識があることを提示し、『千里集』が献上された寛平六年以前、千里は「事件に連坐して謫居」していたこと、そして、寛平六年になっても官位が散位従六位上にとどまったことなどを踏まえ、千里は詠懐歌十首に我が身の不遇を訴える意を込めたと指摘する[1]。小野泰央氏は山口博氏の説を踏まえて、詠懐歌に千里の不遇を天皇に訴える意が込められていることを認めた上で、漢詩文表現も有すると指摘する。そして、「漢文は官人の文章である」としつつ、千里が「詠懐部」で漢詩文表現を用いるのは、官人としての「不遇感を奏上するという切迫した状況下にあったが故」であると推測する[2]。その他に、柳川順子氏は、「句題をそのまま翻訳したようなものが圧倒的に多いが、しかし、原拠詩からかなり外れる歌も一方には確かに存在する」としつつ、「千里詠の原拠詩からの乖離は、彼の不遇を訴えることに発している」と述べ、原拠詩からかなり外れる歌があることに注目し、この原拠詩からの乖離は千里の不遇を訴えることに起因しているという見解を示している[3]。以上の諸説を整理すれば、千里の意図

---

[1] 山口博「人の事につき籠居」(『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』、桜楓社、1973 年 1 月)

[2] 小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」(『和歌文学研究』第 76 号、1998 年 6 月)

[3] 柳川順子「大江千里における『句題和歌』制作の意図」(『広島女子大学国際文化学部紀要』第 13 号、2005 年２月)

は、彼の官位の不遇と、『千里集』における和歌と句題の関係、あるいは詠懐部など、いわば、作品の内部における両者の関係に限定して論じられてきた傾向があると言える。しかし、撰者の意図を検討する際に、官位の不遇などのような撰者自身の状況の他に、編纂の契機などといった作品の外部に目を向けることも必要があろう。そこで、本稿ではこのような問題意識のもとに、作品の来歴を伝える序文に注目する。特に、序文において編纂の契機や撰者である大江千里の状況を言及する「古今」と「餘孽」という言葉に着目したいと思う。そして、この二つのキーワードを切り口として、『千里集』の成立に込められた撰者の意図を検討してみたい。

2.「古今」―編纂の契機

2.1「古今」という語に関する従来の解釈

『千里集』の冒頭に付された序文は、奉献された当時に千里自身が書いたものである。まず、序文の本文を見ておこう。

臣千里謹言去二月十日参議朝臣傳勅曰古今和謌多少献上奉命以後魂神不安遂卧重痾延以至今　臣儒門餘孽側聴言詩未習艶辞不知所為今臣僅枝古句構成新謌別亦加自詠惣百廿首　悚恐震攝謹以擧進豈求駭目欲解頤千里誠恐懼誠謹言

寛平六年四月廿五日

散位従六位上大江朝臣千里上[4]

[4] 千里の位署については、本稿が底本とする伝寂蓮本に「散位従五位上」とあるが、金子彦二郎氏は、それが不審であり、書陵部本にある「散位従六位上」が妥当であると指摘する。したがって、序文に記された千里の位署は、本稿では書陵部本に拠る。（金子彦二郎「句題和歌撰進年時の考察」『平安時代文学と白氏文集：句題和歌·千載佳句研究篇（増補版）』、培風館、1955 年 6 月、235 頁）

これによれば、寛平六年（894）二月十日に、千里は、ある参議朝臣から「古今の和歌を多少献上せよ」との勅命を伝え聞いたとある[5]。千里はその勅命を受けて以来、精神が極度に不安定となり、床に臥せっていたため、献上の期日が延びて今に至ってしまった旨の言い訳が記されている。留意すべきはそれに続く部分で、「臣は儒門の餘孽」であると述べたうえで、詩の吟詠を聞くことはあっても、「艶辞[6]」、即ち和歌を習ったことはないとして、その作り方を知らないとしている点である。それゆえ千里は、古句を捜して新しい歌を作ることにしたと述べている。以上は序文の概要となる。

ここで、序文の細部に目を転じてみたい。まずは、「古今和謌多少献上」とある一節に着目しよう。これは宇多天皇が千里に発した勅命である。宇多天皇が求めた「古今和謌」とは、具体的に何を指すか。この「古今」の語義について、『日本国語大辞典』（第 2 版、小学館、2007 年）で確認しておこう。そこには、「昔と今。古いか新しいか。こきん」、「昔から今までの間。昔から今に至るまでの歴史。」、「（形動）今も昔もならぶものがないこと。また、その人。古今無双。」という解説が見られる。因みに、『千里集』の序文に見える「古今」について言及している先行研究を以下に挙げておく。

（1）「古今は昔から今までの意である。」（平野由紀子･千里集輪読会『千里集全釈』、風間書房、2007 年 2 月、45 頁）。

---

[5] この参議朝臣が誰であるかは特定できない。菅原道真とする説が有力である（平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』、風間書房、2007 年 2 月、44～45 頁）

[6]「艶辞」は中国に由来する文言であり、『漢語大詞典』（上海辞書出版社、1986 年 4 月）に拠れば「艶詞」とも言う。「艶詞」という語について、『日本国語大辞典』（第 2 版、小学館、2007 年 7 月）には「美しい文章。」、「色めいたことば。恋情をうたった歌。また、その文句。」と記している。序文の文脈から見ると、天皇の勅命は「古今和歌多少献上」である。それを受けた千里は「未習艶辞、不知所為」と返答した。「艶辞」は天皇の勅言にある「和歌」に対応する表現であることが分かる。辞書的な意味と結びつけて考えると、序文の「艶辞」は「美しい文章」という意で、勅言の「和歌」の美称として用いられるものだと思われる。ここで、序文の概要をより分かりやすく説明するために、「艶辞」を「和歌」と解釈する。

(2)「古今は千里個人の旧詠近作である」(村瀬敏夫『古今集の基盤と周辺』、桜楓社、1971 年 10 月、47 頁)

(3)「「古今和歌」は昔延喜之御宇、属世之無為、因人之有慶、令撰進万葉外古今和歌一千篇」と貫之集で言う通りで、千里個人の旧詠近作という村瀬氏の指摘(『古今集の基盤と周辺』第二章)は幾分穿ち過ぎる気味がある。ただ、書陵部蔵中務集に、「円融院の仰言にて古歌奉りしに」「今更に老いのたもとに春日野の人わらはへなる若菜つむかな」とあるのは中務個人の旧藻を求められたものようだが、円融院御集の同歌には「中務に歌えりてまゐらすべき由」云々として、西本願寺本中務集にも単に「歌」と記すから、これは特殊な用例と考えてよいだろう。」(吉川栄治「『大江千里集小考』―句題和歌の成立をめぐって」『国文学研究』(66)、1978 年 10 月。)

平野由紀子氏と村瀬敏夫氏は、序文における「古今」の語義について、特に具体的な事例を挙げることなく、持論を示している。平野氏の説は和歌全般を含むかのように受け取れる一方、村瀬氏の説では千里個人の詠作に限定しており、そこに両者の違いが見られる。これを受け、吉川栄治氏は、『千里集』の後に成立した『新撰和歌集』の序文を援引して、当該序文における「古今」の用例が万葉集以降の歌集を含む可能性があると説き、千里個人の旧詠近作を指すという村瀬氏の主張に異を唱える。また、『中務集』の「古歌」の用例を援用して、「古歌」を単に「歌」とだけ記す場合があることに触れつつ、翻って『千里集』の序文に見える「古今」の「古」が、特定し難い語であることを説いている。

こうしてみると、今までの学説は『千里集』の序文における「古今」に対して、概ね、平野氏の説く「昔から今まで」という解釈と、村瀬氏の説く「旧詠(昔)と近作(今)」という二つの方向を提案していることが分かる。いずれも、「古今」という語

の辞書的な意味に収まる範囲で宇多天皇が千里に言った「古今」を解釈していることになろうか。果たして、宇多天皇の勅命における「古今」は具体的にどう捉えるべきか。この問題について、当時の宇多朝の歌壇及び勅命が発する契機という方向から考えてみたい。

2.2『大江千里集』が誕生した当時の宇多朝の歌壇

『千里集』が成立した寛平六年（894）は、菅原道真が宇多天皇に遣唐使派遣可否の再検討を願い出た年でもあった。菅原道真が挙げた、遣唐使の派遣を再検討すべき理由は彼による「請令諸公卿議定遣唐使進止状」（『菅家文草』巻九）と「奉勅為太政官報在唐僧中瓘牒」（『菅家文草』巻十）という二つの資料にうかがえる。「請令諸公卿議定遣唐使進止状」における「大唐凋弊、載之具矣……度度使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊遂亡身者」[7]と、「奉勅為太政官報在唐僧中瓘牒」の「商人説大唐事之次多云、賊寇以来、十有餘年……又頃年頻災、資具難備」[8]は、それぞれ唐の内乱と衰え、及び、災害が頻発し、遣唐の準備が捗らない日本の当時の状況について触れており、また、唐の凋落のみならず、渡航中に使節が命を落とすなどの困難を述べ、遣唐使派遣を廃止すべき理由を訴えている。

但し、道真の建議はあくまでも遣唐使廃止の契機に過ぎない。廃止の実態がそれだけにとどまらないことを従来の研究が指摘してきている。本稿では特に、先行研究の諸説の中でも遣唐使の廃止を国風文化の勃興と関係させて理解しようとする文学的視点に着目したい。孫玉巧氏によれば、「遣唐使的直接使命已完成、而為了消化已経引入的先進中華文化因素并建成一种更适合国情的国風文化、日本需要集中大量的時間和精

[7] 日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、1966 年 10 月、568 頁）
[8] 前掲注 7 書 586 頁

力、因此遣唐使制度的廃止成為必然。[9]」（遣唐使の当面の任務は、完了した。取り入れた先進的な中華文化を消化するとともに、日本の国情に合う国風文化を勃興するために、膨大な時間と精力を投入することが必要である。これにより、遣唐使制度の廃止は必然となった―筆者訳）という。即ち、遣唐使が廃止された実態は、長期にわたって、中国文化を摂取、消化、吸収するなかで、国風文学を勃興させようとする自己意識が次第に覚醒してきたということである。こうした国風文学を勃興させようとする自覚のもとに、和歌もまた、宮廷の行事の中で重要な位置を占め、歌合などが盛んに開催されるようになっていった。宇多天皇も和歌の発展に寄与し、積極的な役割を果たした。宇多天皇の和歌への関与の度合いは、宇多朝における家集献上、歌合などの隆盛からうかがうことができる。中村佳文氏は、この宇多朝という時代に漢詩文と和歌の双方への意識が隆起し、「和漢対峙の意識」とでも言うべき状況が現出したことを、菅原道真の和歌制作に関わって次のように論じている。

> 道真は、漢詩文では白居易周辺の詩人たちの新規な表現を多く取り入れた。その一方で、公の場では影を潜めていた和歌に、道真を含めた宇多帝知遇の歌人たちが、修辞としての新規な見立て表現の発見と漢籍故事の翻案を対峙させるといった趣向を凝らすことによって、漢詩文に匹敵する力を与えていこうとしたのではないだろうか[10]。

千里の句題和歌という趣向も、この道真に見られるような「和漢対峙の意識」に通底するものであると言えよう。このような宇多朝の気運によって和歌が次第に公の場で披露されるようになっていったのである。ちなみに、金子彦二郎氏によれば、宇多

---

[9] 孫玉巧「遣唐使制廃止原因試析」（『咸寧学院学報』第２期、2003 年２月）

[10] 中村佳文「『寛平内裏菊合』の方法―和歌表現の再評価―」（『国文学研究』第 158 号、2009 年 6 月）

朝の九年間（887 年～897 年）に三回の歌合が開かれ、二編の歌集が撰進され、「喜撰式」といった歌論書も作成されたとの調査がある[11]。これらの盛事が催された宇多朝歌壇の特色について、山口博氏は次のような見解を提示している。

> 宇多天皇の膝下において、和歌はフィクシャスな芸術的な方向へ向かっていったのである。宇多天皇の和歌の収集も、この芸術化の方向で考えることができる。歌合の如き競作場が持たれるようになると、多くの人の同意を得るために古典的名歌の模倣が必要となる。芸術は模倣から発する。[12]

宇多天皇による古典的名歌の模倣などといった和歌の芸術化への具体的な試みは、当時の召歌からも窺える。

（１）詞書：寛平御時古き歌奉れとおほせられければ、竜田川もみぢば流る、といふ歌をかきて、その同じ心をよめりける

和歌：深山よりおちくる水の色みてぞ秋は限りと思ひしりぬる

（『古今和歌集』冬・310 番　藤原興風）

（２）詞書：寛平御時、花の色霞にこめて見せずといふ心を、よみて奉れと仰せられければ

和歌：山風の花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

（『後撰和歌集』春中・73 番　藤原興風）

これらは藤原興風の詠んだ和歌とその歌に付された詞書である。詞書によれば、こ

[11] 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集：句題和歌· 千載佳句研究篇（増補版）』（培風館、1955 年 6 月、17 頁）
[12] 前掲注 1 書 53 頁

れらの和歌の成立契機としては、宇多天皇がある歌意を指定し、それをめぐって新しい歌を詠めという勅命を発せられたということが分かる。また、『古今集』の例では興風自身が古歌を選びとっているのに対して、『後撰集』の例では古歌が既に宇多天皇によって指定されてもいる[13]。

こういった古歌を踏まえて新たな歌を詠むという手法は既に『万葉集』にもあり、宮廷儀礼歌、行幸従駕歌などに見られる。例えば、山部赤人が、柿本人麻呂の吉野の宮従駕時の作（巻一・三六番）を踏襲して、吉野讃歌（巻六・九二三番）を作っている。宇多天皇による和歌の芸術化という試みも、おそらくは『万葉集』の時代からあった作歌手法の影響があるかもしれない。

さて、『千里集』の序文における「古今」について、宇多天皇が行った和歌の芸術化への試みの方向に置いて考えてみると、天皇が千里に言った「古今」とは「古と今」、具体的に言えば、「古」は古い他者の和歌、「今」は千里の自作と考えるのが適切だと言える。

では、勅命を受けた千里は宇多天皇の勅命である「古今」をどのように捉えたのであろうか。ここであらためて序文を振り返っておきたい。「未習艶辞　不知所為」という二句は、千里が和歌を習ったことがなく、そのため、和歌をどう作ればよいかを知らないという言明である。この句から考えるに、千里は宇多天皇が言った「古今」が和歌のことを指すと理解しており、だからこそ、千里は和歌については不案内であるという解答を述べているのではないか。また、「今臣僅枝古句　構成新謌」という二句は、千里が古句を捜して新しい歌を作ったという旨の言明である。これは、宇多天皇が求めた「古を踏まえて、今を作る」という歌風に対する千里の応答と言える。こうして見ると、千里は宇多天皇の勅命にある「古今」が「古い和歌を踏まえて、新しい和歌を作る」ことを了解していたはずだと考えられる。

---

[13] 徳原茂実「宇多·醍醐朝の歌召をめぐって」（『中古文学』第 26 号、1980 年 10 月）

即ち、『千里集』の成立契機ともなった宇多天皇の勅命にある「古今」とは、古歌を踏まえて新しい歌を創出するという意味のことである。これに対し、千里が採用した古い漢詩句を踏まえて和歌を詠むという詠歌方式は、ある程度天皇の敕命に従いつつも、漢詩句を句題とした部分については宇多天皇の勅命から逸脱したと言える。天皇が「古今和謌多少献上」の勅命を賜ったことは千里にとって千載一遇の機会と言える。千里は、なぜあえて勅命から逸脱し、他者の漢詩句を句題として和歌を詠むという方法を選び取ったのであろうか。この問題について、まず、大江千里の歌人としての地位、漢詩人としての地位をそれぞれ見据えたうえで考えてみたいと思う。

2.3 文人としての千里

『大江千里集』が奉献される以前に、大江千里は是貞親王家歌合と寛平御時後宮歌合に出詠していた。この二つの歌合について、出詠者の名を知りうるものの歌数をあげてみると、次の表になる[14]。

出詠者	紀友則	藤原興風	壬生忠岑	敏行朝臣	紀貫之	大江千里	有原棟梁	有原元方	宗于	凡河内躬恒	素性法師	当純伊勢 有岑 菅根	是則 美材 忠臣 朝康
是貞親王家歌合	4	1	10	6	3	3	0	3	0	1	0	0	0
寛平御時後宮歌合	14	16	4	4	6	3	5	2	5	3	4	1	1

当時、大江千里は紀友則、藤原興風、紀貫之、凡河内躬恒などの声望が高い歌人に伍して歌を詠んでいたことがわかる。その歌数 6 首は友則 18 首、興風 17 首、貫之 9 首に及ばぬが、凡河内躬恒よりは多い。千里は宇多朝の有力な歌人であったと言える。

[14] 是貞親王家歌合と寛平御時後宮歌合の出詠者と歌数はそれぞれ荻谷朴『平安朝歌合大成（一）』（同朋舎、1995 年 5 月、30 頁、74 頁）により、論者が表を作成した。

また、序文における「去二月十日参議朝臣傳勅曰　古今和謌多少献上」の句によって、わざわざ参議朝臣が大江千里に「古今和謌多少献上」という勅命を伝令したことが分かる。大江千里の他に、川口久雄氏は「当時こういう種類の注文がしばしば出されたことは、寛平御時ふるうたたてまつれと仰ごとありければ（西本願寺本興風集）、ふるうためししをりにそへてたてまつる（西本願寺本友則集）などある」と指摘している[15]。ここからすれば、千里は当時、紀友則、藤原興風などのような一流の歌人と肩を並べられる人物として認められることも確認できる。そして、宇多天皇が大江千里に勅命を発したのも千里の歌人としての才能を期待したからであると言ってもよいだろう。

それに対して漢詩人としての千里はどうか。『古今和歌集目録』には、大江千里について「参議音人卿男。大学々生也」という記載がある。しかし、こういった大学寮で学んだ儒門出身の千里について、金子彦二郎氏の考察によれば、「千里は江家の人たるに拘らず、文学で現存しているものとしては、詩文の類が一篇もないが、和歌の方面における活動には相当に目覚ましきものがある」[16]という。大江千里は当時、歌人として高く評価されていたが、漢詩人としての業績はほとんどなかった。であるからこそ、千里はこの勅命を千載一遇の機会と捉え、漢詩人としての力量を示そうと考えたのではないか。千里が、あえて漢詩句を句題としたことの動機をこのように理解しておきたい。次節では、このような千里の選択を促した背景について当時の人材登用の方針から検討を加えてみたいと思う。

3.「餘孽」―撰者の状況

3.1「餘孽」という語の初出と用例

[15] 川口久雄『平安朝日本漢文学の研究（中）』（明治書院、1982 年 9 月、304 頁）
[16] 前掲注 11 書 165 頁

考察の端緒として、序文の中にある「餘孽」という語に着目してみたい。序文の文脈から見て、千里が用いた「臣儒門餘孽」における「餘孽」は自分の儒門出自に基づいての自称である。この「餘孽」という語がどのように解釈されているかについて、現行の説を顧みておこう。先に挙げた平野由紀子氏は「余孽：ひこばえ。（中略）ここでは出自を謙遜していったもの」と解釈している。また、吉川栄治氏は「余孽は謙辞であり、謙退の裏には儒門の一員としての微かな矜持も感じられよう」と説いている[17]。このように現行の解釈では「餘孽」という語に謙遜の姿勢を読み取る傾向にある。参考までに、『日本国語大辞典』（第2版、小学館、2007年）を紐解いてみると、「餘孽」の項目には「⑴残った切り株に生じる芽。ひこばえ。⑵滅びた家のあとに残っている子孫。滅亡した家の余類。遺類。」という語義を載せている。つまり、「餘孽」という語には、本来的には、滅亡した家系の残党という負のイメージがあり、そのような語を用いるところに千里の謙遜の姿勢を読み取るというのが現行の解釈となっているわけである。こういった解釈に論者も概ね賛成するが、但し、そのような負の側面を持つ語をあえて選んだ千里の動機や背景については、もう少し補足的な説明が必要なのではないか。

因みに、この「餘孽」という語の初出は『後漢書』「段熲伝」に見える「費耗若此、犹不誅尽、餘孽複起、於茲作害。」という一節である。この一節は戦争の場面にあり、「餘孽」を含む当該句は、戦争で殺されずに、残った悪人のことを指す。初出に見られる「餘孽」という語の意味は以降も継承されてゆき、例えば、『全唐詩』に収められた銭起の「送薛判官赴蜀」には「始見儒者雄，長纓系余孽。」とあり、また、李子昂の「西戎即叙」には「元戎咸服罪、余孽尽輸忠。」とあって、これらの漢詩文ではいずれも「餘孽」が残された悪人を指すように用いられる。漢詩文において「餘孽」という

[17] 吉川栄治「『大江千里集小考』―句題和歌の成立をめぐって」（『国文学研究』第66号、1978年10月）

語が用いられる場合、通常はこのような負のイメージを発するものであることを確認しておきたい。

なお、千里が漢詩文の影響のもとに序文を記したと推測されることは、陳斐寧氏によって説かれている。陳氏によれば、「和歌集であるものの、その時代の規範として継承されてきた序文様式とは、まったく違う書式がついている。中国の「進書表」はこのような共通の書式を持っている」とのことで、その書式は中国の「進書表」の様式に近いという[18]。また、坂倉貴子氏も『千里集』の序文は「上表文としての機能を併せ持つものである」と説く[19]（上表文は進書表と同様であり、帝王に上奏するに当たって用いる文体の一つである）。示唆に富む指摘である。但し、中国の「進書表」を見てみると「餘孽」という語は見当たらず、代わりに、「臣」という人称を「孽」と結合する例が少なくない。

・近者神祇启悟陛下、発赫斯之怒、故王甫父子応時馘截、路人士女莫不称善、若除父母之仇。誠恐陛下復忍孽臣之類、不悉殄滅。昔秦信趙高、以危其国、吴使刑人、身遭其禍[20]。

（番忠『上書劾朱瑀』）

・灵帝数以車騎将軍過拜孽臣内孽、又贈亡人、顕号加于頑凶、印綬汚于腐尸[21]。

（応劭『五行志』）

ここに掲げたものは「進書表」の事例となるが、そこには「孽臣」とあり、これら

[18] 陳斐寧「『大江千里集』の序文から見た「内」と「外」」（『国際日本文学研究集会会議録』第 29 号、2006 年 3 月）
[19] 坂倉貴子「序の性質 ：『大江千里集』の場合」（『学芸古典文学』第 3 号、2010 年 3 月）
[20] ［清］嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』「第二冊、全後漢文巻六十六、番忠の『上書劾朱瑀』」（上海古籍出版社、2009 年 3 月、136 頁）
[21] ［清］嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』「第二冊、全後漢文巻四十一、応劭の『五行志』」（上海古籍出版社、2009 年 3 月、１頁）

は罪を犯した悪臣を指す語として用いられている。いずれも自称の用例ではなく、したがって著者が自分を謙遜するものとしては使われていないことがわかる。

「餘孽」という用例に関しては、少し時代は下るものの、室町期の『碧山日録』に次のような用例がある。

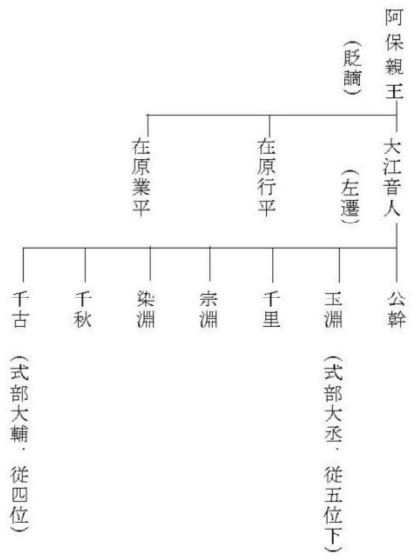
・関左持氏（足利）之余孽（足利成氏）未除、戎馬紛紜、雖官軍討之、敵勢愈張[22]。

これは、第四代鎌倉公方足利持氏の息子である足利成氏に関する記述である。成氏は永享の乱に敗死した人物となるが、その成氏に対して「余孽」の語が用いられている。これは漢詩文での用法と同じく罪人の後裔を指す。やはり、謙遜の用法ではない点に留意しておきたい。

このように「餘孽」という語は初出の時点から、好ましくない負の語感を帯びており、後世に至っても悪人あるいは罪人の後裔を指すものであることが分かる。前述した通り、序文の文脈から見て、千里が用いた「臣儒門餘孽」における「餘孽」は自分の儒門出自に基づいての自称である。では、大江の一族は一体どのような罪を犯したというのか。次に、大江氏の系譜を見ておこう。

3.2 大江家の一族と昇進を望む千里

[22] 太極『碧山日録 1』（八木書店、2020 年 2 月、65 頁）



千里の父音人は有数の儒学者であり、祖父は諸説あるものの、阿保親王と見る説がある[23]。阿保親王の事績を振り返っておくと、810 年、宮廷内部で薬子の変という事件が起きた。これは、平城上皇と嵯峨天皇が対立し、平城上皇が出家することで落着することになった事件であるが、この事件で処分された関係者の中に平城上皇の皇子阿保親王がいた。彼は大宰権帥に貶謫された。阿保親王は更にその後、842 年に再び政争に巻き込まれることになる。すなわち承和の変である[24]。この事件では、千里の父である大江音人も、連座して尾張の国に配流されたと推定されている[25]。

このような祖父や父を持つ千里であることを踏まえると、本稿で問題としている「餘孽」という語には、単なる謙遜の表現という解釈にとどまらず、実際に歴史上で起きた事件が背景として浮かび上がってくるのではないか。即ち、千里が自称として用いたこの「餘孽」には、左遷、貶謫などの罰が与えられた大江氏の後裔という史実

[23] 例えば、今井源衛は音人を阿保親王の子としている（「大江音人安保親王子息説をめぐって」『王朝の物語と漢詩文』、笠間書院、1990 年 2 月、94 頁）。また、目崎徳衛も、阿保親王の説明として「桓武天皇の皇女伊都内親王との間に第五子在原業平があり、また大江音人・在原行平らもその子である」とする（「安保親王（あぼしんのう）」『国史大辞典』１巻、吉川弘文館、1979 年 3 月、284 頁）

[24] 阿保親王の事跡については目崎徳衛「在原業平の歌人的形成」（『平安文化史論』、桜楓社、1968 年 11 月、165 頁）を参照。

[25]『公卿補任』貞観六年の「大枝音人」の項に「（承和）九ー配流尾張国」とある。

が籠められており、千里はそのような立場に自分が置かれていることをあえて宇多天皇に対して表明したものであると考えられる。

では、なぜ千里は、あえて罪臣の一門であるという出自を表明したのだろうか。この事を考えるにあたって参考となるのが千里の兄弟たちの官職である。『千里集』が献上される以前に、千里の弟の千古は従四位上相当の式部大輔に任じられていた[26]。玉淵も仁和二年（886）に従五位下の式部大丞に任命されていた[27]。こういった兄弟たちに対して、千里の官歴はどのような状況であったか。彼の官歴を遡及できる資料として、下記のものが挙げられる。

・『古今和歌集目録』：参議音人卿男。大学々生也。延喜元年三月十五日任中務少丞。陽成院御給。二年二月廿三日任兵部少丞。三年三月廿六日轉大丞。[28]

・『大江千里集』（書陵部本）の序文：寛平六年四月二十五日、散位従六位上。

・『尊卑分脈』：兵部大丞、歌人古今巳下作者。[29]

・『大江氏系図』：千里、伊豫守正五位兵部大丞、歌人。[30]

・『中古歌仙三十六人伝』：備中守本主孫。参議右衛門督音人男。或説音人孫。右京

---

26 『大江氏系図』（『続群書類従』第七輯下・系図部）の「千古」の項に「従四位上中納言式部大輔との記載がある。また、群書類従本『句題和歌』補遺・詠懐部の歌「都さ〔ま歟〕て波立くともきかなくにしはしたになとみのしつむらん」の詞書には、「つみなかりしかとも人の事につきてしはらく籠居すへきよしありしころ式部大輔のもとへこまやかに申しをくりしふみのおくに」とあり、『千里集』献上以前に千古が式部大輔に任ぜられていたと推定される。なお、この詞書に見える「式部大輔」が千古と解されることについては、井上辰雄『平安儒者の家　大江家のひとびと』（塙書房、2014 年 3 月、272 頁）を参照。また、内田美由紀「群書類従本系統「大江千里集」の文保二年増補歌について：千里の伝記に関連して」（『百舌鳥国文』第 7 号、1987 年 10 月）にも同様の指摘がある

27 『日本三代実録』仁和二年正月十六日条に「従五位下行式部大丞大江朝臣玉淵為日向守」とある（新訂増補国史大系『日本三代実録』後篇、吉川弘文館、1989 年 6 月、605 頁）

28 藤原仲実『古今和歌集目録』（『群書類従』第十六輯・和歌部、続群書類従完成会、1934 年 4 月、131 頁）

29 黒板勝美『新訂増補国史大系第六十巻下　尊卑分脈　第四篇』（吉川弘文館、1967 年 1 月、92 頁）

30 前掲注 26 書

大夫玉淵男云云。元慶七年十一月十一日任備中大丞。延喜元年三月十五日任中務少丞。二年二月廿三日任兵部少丞。三年二月廿六日轉大丞。[31]

『大江氏系図』では千里が伊豫権守についたことを載せていたが、伊豫へ赴任した年代が未詳である。上述の千里の官位、官職、年代が明確に記された資料を統合して、千里の官歴をまとめてみると、下表のようになる。

年代	884 年	894 年	901 年	902 年	903 年
官職	備中大丞	——	中務少丞	兵部少丞	兵部大丞
官階	正六位下	散位従六位上	従六位上	従六位上	正六位下

なお、千里は生没年が未詳である。山口博氏によれば、「千里は延喜初年には老年、延喜三年（903）二月が官暦（カンレキ）の最後で、『古今集』成立の延喜五年（905）前に没入したことがわかる。延喜五年にかりに五十五歳とすると、元慶七年（883）には三十三歳、文徳朝の仁寿元年（851）の生となる」[32]と推測する。当該表と結びつけてみると、千里は不遇のうちに生涯を送った人物と言える。『千里集』を宇多天皇に献上した寛平六年の時点では、千里は散位従六位上という低い官位にとどまっていた。兄弟たちの昇進に対して、相変わらず卑官にとどまっている自身の苦境に千里の中では劣等感が生じていたとも推測される。次に掲げるのは『千里集』の詠懐部に収められた歌であるが、千里の胸中をうかがうことができる。

おもふこと なくうぐひすに つけたれば いろもかはらぬ われひとりへて

[31] 藤原範兼『中古歌仙三十六人伝』（『群書類従』第五輯・伝部、続群書類従完成会、1932 年 10 月、388 頁）
[32] 前掲注 1 書 143 頁～144 頁

――『大江千里集』 詠懐 123 番

この歌では、「いろ」が「かはらぬ」のは「われひとり」だけであるという千里の自己認識が詠まれている。千里は鶯の色と六位の官袍の色との類似性を切り口として、低い官位から脱出できないのは「われひとり」だけであると、自分のみが昇進できない憂愁を述べている。兄弟たちよりも昇進が遅れていた千里は、当然のことながら昇進を望んでいた。この昇進に対する欲求は次の 120 番歌に顕著である。

あしたづの ひとりおくれて なくこゑは くものうへまで きこえつかなん

――『大江千里集』 詠懐 120 番

この歌では「鶴」と千里自身がオーバーラップしており、「ひとりおくれる鶴」は兄弟たちより昇進が遅れる千里自身のこととなる。そして、その遅れている鶴の「なくこえ」が「くものうへまで」に聞こえて欲しい、即ち、昇進の遅れている私の声が宮中まで聞こえ届いて欲しいと願った歌となっている。

不遇な状況に身を置き、昇進を切望する千里は、宇多天皇に歌集を献上するにあたって、あえて勅命から逸脱し、「古歌」ではなく、漢詩句を参照して和歌を詠むという作歌方法を取った。このような逸脱した作歌方法を取った理由について、当時の人材登用の方針からながめてみたい。

千里の心情を理解するには、時代を少し遡って嵯峨朝を顧みておく必要がある。嵯峨天皇の弘仁年間は漢詩文が隆盛となった時期であった。嵯峨朝の弘仁年間、朝廷では「蓋文章経国之大業、不朽之盛事」という気運が高まる。この標語は魏文帝が著した『典論』に由来し、「文学は国を治めるのに匹敵するほどの大事業で、永久に後の世に残る盛事である」という意味で、文学の政治的効果を謳ったものとなる。小島憲之

氏はこの嵯峨朝の気運について、「『経国』ということばの中にはそれほど強い政治性はない。ねらいは文学すなわち「詩」を作ることであり、詩に表現することは、朝廷・官人にとって最も自己の心を述べる『たづき』であった」と指摘する[33]。嵯峨朝における漢詩の地位を向上させる風潮は人材登用の方針にも投影されていた。『経国集』の巻 20 に収められている官吏採用試験の際の奉試の詩などに見られるように、当時、官吏の道につくためには作詩が不可欠な素養であった。ここに「文章経国之大業」という主張の下で、儒者が重視された一側面を窺うことができよう。

作詩の風潮はその後も継続する。滝川幸司氏の調査によれば、仁明朝において三十二回、清和朝において二十五回、宇多朝において四十二回の天皇主催による詩宴が催され、詩宴に召された献詩者は詩に堪能な文章道出身の官人や、蔵人などであったという[34]。宇多天皇もまた、作詩に秀でた儒門出身の者を優遇し、政治に関与させた。その顕著な例として、『日本紀略』八九六年二月二十三日条の、「天皇幸神泉苑。召文人賦詩。其題。花間理管弦。又召学生奉試。賦同題。及第者三人也。」[35]という記事が挙げられる。この記述によると、宇多天皇が神泉苑に行幸した際に、そこで文人たちに詩を作らせ、その場で優れた文章道の学生を三人及第させたとある。陳斐寧氏はここに、儒者を積極的に政治に関与させようとする宇多天皇の人材登用の姿勢が窺えると指摘する[36]。

また、宇多天皇が儒門出身の文人に信頼を寄せる傾向は『本朝文粋』巻第七に収められた三善清行の文書「奉左丞相書」にも見られる。これは道真の左遷事件が起きた際、累禍の拡大を抑えるために、三善清行が藤原時平に献じた文書であり、そこには、

---

[33] 小島憲之「『古今集』への遠い道―九世紀漢風賛美時代の文学―」(『文学』第 53 巻 12 号、1985 年 12 月)
[34] 滝川幸司「宇多朝の文壇」(『奈良大学紀要』第 30 号、2002 年 3 月)
[35] 新訂増補国史大系『日本紀略』第十巻・前篇(吉川弘文館、1965 年 5 月、544 頁)
[36] 前掲注 18 論文

「外帥累代儒家、其門人弟子、半於諸司」[37]という一節がある。書状における「外帥」は菅原道真のことを指す。その意味は、道真は累代の儒家菅原氏の出身であり、同門の弟子たちは各役所に務める人々の半分以上を占めるというもので、儒門の出身ではない時平を牽制している。そして、『宇多天皇御記』の仁和四年（888）九月十日の条に、宇多天皇が漢学者である橘広相に「朕之博士是鴻儒也、当以太政大臣令摂政之詔書、令此人作之」[38]という記述がある。ここで、橘広相が宇多天皇に重用された原因の一つは橘広相が儒学に秀でていたからであることが分かる。

こういった儒者に対する抜擢傾向の下で、政治に熱情を持って不遇の苦境から脱出する望みを抱いた千里にとって、歌集撰進という事業は絶好の機会として意識されたに違いない。それは、和歌のアンソロジーに千里の持つ漢詩文に関する教養をどう織り込むかという、未だ誰も着想しなかった新たな試みを触発することになったと考えられる。

4. 終わりに

本稿では、『大江千里集』の来歴を伝える序文に注目し、特に、序文において当該歌集の編纂の契機と撰者の状況について言及する「古今」と「餘孽」という言葉を端緒として、『大江千里集』の成立意図の検討を行った。『千里集』の成立契機となる宇多天皇の勅命にあった「古今」とは、古歌を踏まえて新しい歌を創出するということである。このような勅命が千里に下ったのは、当時既に歌人としての才能を千里が見せていたことによる。これに対して千里が応じたのは、古い漢詩句を踏まえて新たに和歌を詠むという方式であった。

---

[37] 新日本古典文学大系『本朝文粋』（岩波書店、1992 年 5 月）
[38]『続々群書類従』第五輯・記録部（続群書類聚完成会、1932 年 10 月）所収

千里の構想した歌集は、ある程度宇多天皇の敕命に従うものであったが、漢詩句を句題とする点は他に類例を見ない新機軸によるものであった。このような試みをあえて実行した千里の意図について、本稿では「餘孽」という語を手掛かりに検討を加えてきた。そこには、大江氏という儒門の一族に生まれながらも、漢詩文の世界では頭角を現わせず、昇進が兄弟より遅れた千里の劣等感がうかがえる。そのような千里にとって、宇多天皇による新たな歌集の依頼は、昇進につながる絶好の機会としてあったのではないか。千里はその機会を逃さず、儒者を重視する宇多天皇に対して、自身の構想した通りに漢詩文の素養を示し、漢詩句と和歌を結びつけるという新しい趣向を披露したのである。このようにして完成した『大江千里集』は、和歌史の上で句題和歌という新たな形式を打ち出すことになった。

第二章

『大江千里集』の述懐部に関する考察

―その主題をめぐって―

1.はじめに

『大江千里集』には「述懐」という部立てが設けられている。「述懐」という語はもともと中国の漢詩題に用いられてきたものである。「述懐」を題にもつ詩は、早くには中国の張載、支遁の作にあり[1]、初唐詩では、「述懐」の詩題が李百薬、魏徴、李嶠などの作に見える。一方、日本の漢詩集では、「述懐」は詩題として『懐風藻』、『文華秀麗集』に見える。また、和歌集では、『万葉集』の題詞や左注に「述懐」の語が散見する。「述懐」を和歌の部立てとして採用したのは『大江千里集』が嚆矢となる。

「述懐」とは「自分の思ひを述べる。所懐を述べる」意である[2]。『千里集』の「述懐部」には歌が十二首あり、そのうち十首が『白氏文集』における詩句を句題とする。しかし、句題の典拠となった『白氏文集』には「述懐」を題とする詩は一首もない。なお、試みに『白氏文集』を見てみると、出典となった漢詩の所収先は巻十三から巻六十五にわたって散在していて、特定の巻に偏っているわけではない。果たして、千里はいかなる基準から『白氏文集』所収の漢詩を選び、その句を題として歌を詠出したのか。そして、それらの和歌に込められた「所懐」とはいかなるものであるか。

ちなみに、『千里集』には「詠懐」という部立ても設けられている。部立ての名称から見れば、「述懐部」と同じく千里の「所懐」が述べられた歌が集められているものと解せる[3]。従来の『千里集』の研究では、「詠懐部」については、先行研究が積み重ねられており、そこに収められた歌群が千里の自らの不遇を天皇に訴えるものである、と指摘されてきた（第三章で詳述する）。それに対して、「述懐部」については、あまり注目されてこなかった。「述懐部」を中心とする論は管見の及ぶ限り、皆無である。

---

[1] 小島憲之『日本古典文学体系 69　懐風藻· 文華秀麗集· 本朝文粋』（岩波書房、1964 年 6 月、71 頁）

[2] 諸橋轍次（著者）、鎌田正・米山寅太郎（修訂増補）『大漢和辞典』巻十一（大修館書店、2001 年 12 月、23 頁）

[3]「詠懐」という語については、『文鏡秘府論』南巻に「詠懐者、詠其懐抱之事」という解説が見られる（〔日本〕遍照金剛、周維徳校點『文鏡秘府論』、人民文学出版社、1980 年 3 月、135 頁）。定義通りに考えるならば、「述懐」と「詠懐」は概念が重なり合う二つの言葉である。

また、「述懐部」に言及する論があったとしても、それらの論では、「詠懐部」と一括にして論じられる傾向にある。例えば、内田徹氏は「そもそも「述懐歌」という表記自体は既に『万葉集』に見られることであるが、自身の憂いを嘆くものという明確な意図のもとに詠まれた述懐歌としては、大江千里の「句題和歌」と、それとともに献上された「詠懐」の歌十首が最初期のものと考えられる」と指摘し[4]、両者を弁別してはいない。また、太田善之氏は「『述懐』部に端的に見られるように、嘆老や不遇の訴えが『千里集』の意図であると言えよう」と説く[5]。木村尚志氏は太田氏の論と同様であり、「寛平6年（894）4月25日、散位従六位上の大江千里は宇多天皇の勅命を受け、126首の『句題和歌』を献上した。末尾には「述懐部」12首と「詠懐」10首の計22首の歌がある。昇殿を許されない身の不遇の愁訴が見出せる」と述べる[6]。論者は、「詠懐部」の歌が不遇詠であることについて先行研究と同様の立場であるが、「述懐部」の歌も「詠懐部」と同様に不遇詠として把握されてきたことについては、見解を異にしている。

したがって、こういった先行研究の状況に対して、本稿では、「述懐部」に収められる和歌と句題を分析し、そこに詠まれる千里の「所懐」を考察する。

また、もう一つ留意したいのは、実は「述懐部」における十二首の和歌のうち、句題の趣旨を踏襲する和歌もあれば、そこから乖離する歌もあるという点である。ここで、日本における中国文学の受容について述べた大曽根章介氏の次の発言を顧みておきたい。

> 何を模倣したかと同時に如何に摂取したかの考察が大切であろう。受容の際の取捨選択、換骨奪胎の姿勢に眼を向けねばならない。類似とともに差異を明白にす

[4] 内田徹「述懐歌の形成」（『文藝と批評』第6巻5号、1987年2月）
[5] 太田善之「『大江千里集』の歌学」（『学芸国語国文学』第32号、2000年3月）
[6] 木村尚志「述懐歌の歴史」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』第13号、2010年3月）

ることによって、日本的な表現あるいは日本人の感情思考を考察することができるのではなかろうか[7]。

大曽根氏の指摘に従って、本稿では、「述懐部」の和歌と句題を分析する過程で、句題から乖離する歌にも着目し、その乖離の背景には千里のどのような「感情思考」が働いているのかについて検討を加える。

さて、「述懐部」における和歌と句題について分析していこう。

2.『千里集』における「述懐部」の主題

『千里集』の「述懐部」には歌が十二首ある。そのほとんどが白居易の詩を句題とするものである。それらの詩では概ね、無常観、閑適の気分、諦念や嘆老が交錯する感懐が詠まれていると考えられる。ここではまず、無常を嘆く次の四首を見ておこう。

句題：浮生短於夢

和歌：よるべなく　そらにうかべる　こゝろこそ　ゆめみるよりも　はかなかりけれ

―『大江千里集』　述懐部　108 番

句題原拠詩：

草潤衫襟重、沙乾屐齒輕。

仰頭聽鳥立、信脚望花行。

暇日無公事、衰年有道情。

浮生短於夢、梦里莫營營。

[7] 大曽根章介「和漢比較文学の諸問題」（『和漢比較文学叢書―和漢比較文学研究の構想』、汲古書院、1986 年 3 月）

―『白氏文集』「野行」　巻十八　1162[8]

この歌の句題は「夢」を素材として、無常を詠むものである。「夢」は無常の譬喩的表現として仏典に散見される。たとえば、「一切有為法　如夢幻泡影　如露亦如電　応作如是観。」(『金剛般若経』)、「是身如夢、為虚妄見。」(『維摩詰所説経・方便品第二』)などの仏典で、「夢」という語は、あらゆるものがはかないということの喩えとして用いられる。当該句題は、浮生、すなわち人生は夢より短いという意であり、夢で人生の無常を表している。この句題を踏まえて千里が詠んだ歌でも、夢で無常を喩えるところは句題と同様であるが、詠む対象と感情が句題とは異なっている。句題では詠む対象が「浮生（＝人生)」であるのに対し、歌では「浮かべるこころ（＝心)」とあって、「生」が「心」に詠み替えられている。そしてその「空に浮かべる心」を形容するものとして「よるべなく」という句が置かれ、頼りとするところのない「こころ」の不安定感が象られている。歌全体が「～こそ～けれ」という構文の形式を採用している。「心」には「こそ」が下接し、心の無常の状態が強調されている。そして、こうした心の有り様から発して、後半の下の句においては、句題の「短於梦」が「ゆめみるよりもはかなけれ」と解釈され、夢を見ることよりもはかないものとして心が位置づけられていく。歌中の「こそ」と係り結びを成している文末の「けれ」はそういった心の無常に対する詠嘆を示していよう。以上の分析の通り、当該歌は、頼りとするところの無い不安定な心に気づきつつ、そのような心の有り様は夢より儚いものであったという詠嘆に主眼が置かれている。

句題：幻世春来夢

[8] 本稿で取り上げる句題の原拠詩は『千里集全釈』に掲載される那波本『白氏文集』などに拠る。

和歌：まぼろしの よとししりぬる　こゝろには はるくるゆめと[9] おもほゆるかな

―『大江千里集』 述懐部 111 番

句題原拠詩：

海内時無事、江南歳有秋。

生民皆楽業、地主盡賢侯。

（略）

飽飡為日計、穏睡是身謀。

名愧空虚得、官知止足休。

自嫌猶屑屑、衆笑大悠悠。

物表疎形役、人寰足悔尤。

蛾須遠澄燭、兎勿近置罘。

幻世春来夢、浮生水上漚。

百憂中莫入、一醉外何求。

（略）

志氣吾衰也、風情子在不。

應須相見後、別作一家遊。

―『白氏文集』「想東遊五十韻併序」巻五十七　2717

111 番歌の句題も「夢」を素材として、無常を詠むものである。意味は、この世は幻で春の夜の夢のようなものであり、世の中の虚しさを詠む。これも夢で無常を喩える漢詩句と言ってよい。111 番歌は句題と同じく、世の中の無常を夢で喩えている。歌の

[9] 底本の伝寂蓮本は「はかなきゆめ」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』によって、「はるくるゆめ」に改めた。

上の句にある「まぼろしのよ」は句題の「幻世」と対応し、その後に続く「しりぬるこころ」に相当する部分は句題には無く、和歌において新たに添加されたものである。なお、無常が「知る」という語と結合して詠まれる歌は『万葉集』にも散見し[10]、「知る」は無常を詠む和歌によく用いられる表現とも言える。また、四句目の「はるくるゆめ」は句題の「春来夢」と対応しているが、結句の「おもほゆるかな」は和歌独自の表現である。歌全体では、句題で提示されていたものを「～としりぬる、～とおもほゆる」と認識していく形式になっており、そこに和歌独自の構造を見て取ることができる。この構造は歌にどのような固有の意味を加えるのか。歌の上の句はこの世が幻であると感知したことを説く。それを受ける下の句も詠者の感知を説くものであるが、「おもほゆ」が自発の助動詞「ゆ」と接合した語である点に留意すれば、その感知が自発的な理解として捉えられていると言える。そして、そのような心の反応を受けつつ、和歌全体を統括しているのが詠嘆の終助詞「かな」である。これらの表現の配置を踏まえると、句題で提示された無常が和歌では自発的な心の理解を促し、それを受け入れて詠嘆するものとなっていることが読み取れる。

句題：身覚浮雲無所着

和歌：わがみをば　うかべるくもに　なせればぞ[11]　ゆくかたもなく　はかなかりける

―『大江千里集』　述懐部　110 番

句題原拠詩:

身覺浮雲無所着、心同止水有何情。

---

[10] 例えば、「世の中はむなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（大伴旅人・巻五・793 番）、「うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み思ひつるかも」（大伴家持・巻三・465 番）や「世間の常なきことは知るらむを心尽すな大夫にして」（大伴家持・巻十九・4276 番）、などの歌が見られる。

[11] 底本の伝寂蓮本は「なされはそ」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』に拠って、「なせればそ」に改めた。

但知瀟灑疎朝市、不要崎嶇隠姓名。

盡日觀魚臨澗坐、有時隨鹿上山行。

誰能抛得人間事、来共騰騰過此生。

―『白氏文集』「答元八郎中楊十二博士」　十七巻　1067

110番歌の句題は、空に浮かんでいる雲のように捉えどころない我が身の状態を詠む。それは原拠詩の第二句「心同止水有何情」に詠まれた静止している水のように落ち着いている「心」の状態と対比をなして、浮雲によって頼りとする所の無い身の不安定な様子を表している。身の無常を浮雲に喩えるこのような表現は、『維摩詰経』十喩における「是身如浮雲、須臾変滅」という一節に対応している。この句題を受けた 110番歌も浮雲を素材として身の無常を詠むものとなる。歌では、「わがみをば　うかべるくもに　なせればぞ」と上の句において句題の「身覚浮雲」を翻案し、「うかべるくも」で「わがみ」の無常を喩えている。また、下の句の第四句目「ゆく方もなく」は句題の「無所着」を翻案したもので、それを結句で「はかなかりける」と受ける。歌全体の構成に目を向けると、上の句には係助詞「ぞ」が付され、下の句の「ける」との間で係り結びの関係を形成している点が留意される。山口明穂氏によれば、「ぞ」による係り結び文について、「『ぞ』係り句が結び句に対する注釈的述語をなしている」とし、また、「係りの『ぞ』は、当該箇所を指定・強調する役割を果たしているのである」と説く[12]。これを踏まえると、当該歌で強調されているのは上の句の、我が身を浮雲に譬えていることとなるであろうか。そして、このような身を浮雲に喩える表現は、下の句の「ゆく方もなく　はかなかりける」を説明する修飾連文節となり、不安定な身のはかなさを具象化する。なお、上の句の「ぞ」と係り結びを形成している句末の「ける」が詠嘆を表していることは言うまでもない。当該歌は、句題に提示された我が身の無

[12] 山口明穂『日本語文法大辞典』（明治書院、2001年4月、397頁）

常という様相を受けて、それを詠嘆的に詠んだものと解せる。

句題：浮生水上漚

―『白氏文集』「想東遊五十韻併序」巻五十七　2717

和歌：かりそめに　しばしうかべる　たましひの　みづのあわとも　たとへられつゝ

―『大江千里集』　述懐部　112 番

112 番歌の句題原拠詩は前掲の 111 番歌と同じであり、ここで掲げない。当該歌の句題は浮生、すなわち人生は水の泡のようなものであると詠んだものである。人生を喩える素材としての「漚（＝泡）」は仏典に頻出する語である。先に挙げた『金剛般若経』の他にも、「万物為泡、意如野馬」（『法句経・世俗品』）、「是身如泡、不得久立」（『維摩詰所説経・方便品第二』）などのように、仏典では「泡」は儚く、消えやすいという無常の有り様を喩えるものとして用いられる。112 番歌の句題でも、「泡」で人生の儚さ、消えやすさを喩えている。112 番の歌は、句題と同じく「泡」を素材として無常を詠む。歌では、「泡」が譬えるのは「たましひ」となる。その「たましひ」に掛かる言葉は「かりそめに」「しばしうかべる」の二句であり、それらの句によって「たましひ」のはかなさ、消えやすさが示される。また、下の句の末尾には「つつ」という語が置かれており、この語によって詠嘆的に文が終結する。以上の分析により、当該歌は、魂が何度も水の泡に喩えられながら、はかなく消えていくことを詠嘆的に詠んだものであると解せる。

以上の四首は無常を嘆く歌となる。歌の句題となっているのは全て仏典に頻出する譬喩的表現であり、事物を用いて無常を詠む詩句である。そのような句題を踏まえて詠まれる和歌も、句題が素材とした事物を無常の譬喩として構成されており、不安定な心と身、儚い人生や世などの無常を嘆くものとなっている。

これらの無常を嘆く歌に対して、以下に掲げる 104 番、109 番、115 番の歌にはやや異なる無常観へのアプローチが見て取れる。そこには、無常を克服しようとする姿勢がうかがえるのである。まずは、104 番の歌を見てみよう。

句題：自静其心延寿命

和歌：さだめなき こゝろひとつを なしつるぞ いのちをのぶる ものにぞありける

―『大江千里集』 述懐部 104 番

句題原拠詩:

不出門来又數旬、将何銷日與誰親。

鶴籠開處見君子、書卷展時逢古人。

自静其心延壽命、無求於物長精神。

能行便是眞修道、何必降魔調伏身。

―『白氏文集』「不出門」 巻五十七 2749

104 番歌の句題は自らが心を静かにして、寿命を延ばすと詠むものである。句題の中にある「自静其心」とは心の調え方で、「延寿命」のための方法である。それを踏まえて詠まれた歌も、心の有り様を調えることによって寿命を延ばすと詠むものであるが、心の調え方の面で句題との相違が見られる。まずは、原拠詩と合わせて、句題における心の調え方、すなわち「自静其心」の意味について確認しておきたい。当該句題の出典は、『白氏文集』巻五十七に所収された「不出門」という漢詩である。首聯、及び頷聯の句「不出門来又數旬、將何銷日與誰親。鶴籠開處見君子、書卷展時逢古人」は、「外出しなくなってからこのかた更に数十日を重ねた。何によって日々を過ごし、誰と共に親しく交際しようか。鶴の籠を開けば、君子のようなその姿が眺められるし、

書物を広げれば、同じ思いを持つ古人に出会うことができる」という意であり[13]、これは要するに、外界と隔絶し、老荘の外物論[14]に基づいて悠々自適な閑居生活の状態を描写したものである。それを踏まえると、句題に言う「自静其心」は、自らが独りで静かで安楽な老荘的閑居生活を送ることによって、心の平静に達するという境地を指すと言える。

対して和歌では、句題にある「延寿命」を「いのちをのぶる」と直訳するが、「自静其心」については、「さだめなき　こころひとつをなしつる」と詠んでいる。「こころ」の前に「さだめなき」という語を新たに添加して、不安定で落ち着かない散乱の心の有り様を提示するのである。そして、こういった心の状態に対し、「こころひとつをなしつる」という対処法を打ち出している。「こころひとつ」という表現は『古今集』の歌「女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらむ」（秋上・230 番・佐大臣）に見られる。この「こころひとつ」という表現について、小島憲之・新井栄藏両氏の校注によれば、「漢語（尚書など）の『一心』に当たり、専心・真心・誠などに通じる意」であるという[15]。なお、「こころひとつ」という表現は、『日本国語大辞典』にも立項されており、そこでは「他の考え方を切り捨て残った、たった一つの考え方。その考えだけ」とある[16]。それを踏まえて、「さだめなき　こころひとつをなしつる」は不安定で落ち着かない散乱の心を一つに鎮めようと試みるという意となる。なお、「さだめなき　こころひとつをなしつる」という表現について付言しておくと、『千里集』以前の和歌において、「さだめなき」が「こころひとつ」という心の状態を形容する連体

[13] 岡村繁『新釈漢文大系第 106 巻 白氏文集（十）』（明治書院、2014 年 12 月、57 頁）
[14] 老荘思想では、仁義、世間的な名声、欲望をさそう財貨、五味、五色、五声などのような心以外のものは全て「外物」として、その価値を否定してしまう。そこから、これらの「外物」を遠ざけ、退ける所には初めて自然の性が保たれる、という考え方が出てきたのである。（小川環樹『世界の名著 4 老子 荘子』、中央公論社、1978 年 7 月、40 頁）における「外物」に関する解説を参照。
[15] 小島憲之・新井栄藏『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』（岩波書店、1989 年 2 月、81 頁）
[16]「こころひとつ」『日本国語大辞典』（第 2 版、JapanKnowledge デジタル版、小学館、2007 年）

修飾語として使用される用例は見られない[17]。このような、通常は和歌の中で用いられない表現によって示された姿勢は、仏教では煩悩を解決し、真理を体得したりするために考案された心の調え方、すなわち「摂心」と呼ばれる坐禅修行法に通じると考えられる。「摂心」とは、「散乱の心を一つに摂むこと」[18]、「心を一境に専注して馳散せしめず、以て禅定に入るを云ふ」[19]といった意味で、諸仏典によく見られる術語である[20]。修行において「摂心」を行う目的は煩悩に覆われた心中の雑念を除き、思いを集中し、心を動揺させずに、そこから悟りの智慧を追求するところにある[21]。つまり、「摂心」そのものは根本的に言えば、煩悩による雑念をはらい、心を動揺させることなく思いを集中するという心の調え方を指すのである。

さて、以上を踏まえて、あらためて和歌に視線を転じてみると、「さだめなき　こころひとつをなしつる」とは、不安定な心を雑念無く動揺させず、専念しようと試みることを指す、と解せる。和歌全体の意味としては、不安定な心を雑念無く動揺させず、専念しようと努めることこそ、寿命を延ばすものである、となる。このように見てくると、心の調え方の面で、安楽な老荘的閑居生活を送ることにより、心を静かにすると主張する句題と比べ、和歌の重点は無常に覆われた心が覚える不安定感への対処に置かれると言える。雑念を除き、不安定な心を動揺させずに、専念させるというのは、あたかも仏道修行者的な心の調え方として打ち出されているかのようでもある。

次の 109 番歌は人間感情そのものが無常であるという理念に立脚し、そこから、人

---

[17] 調査は古典ライブラリーと和歌データベースに拠る。

[18] 織田得能『織田得能著佛教大辭典』第二冊（名著普及会、1977 年 7 月、1035 頁）

[19] 望月信亨『望月佛教大辭典』第三巻増訂版（世界聖典刊行協会、1954 年 5 月、2929 頁）

[20] 例えば、「摂心為戒、因戒生定、従定発慧」（『首楞厳経』）、「汝等比丘、若摂心者、心則在定、心在定故、能知世間生滅法相」（『仏遺教経』）、「是人応当、在空閑処、摂心常坐、及誦大乗経、一切重罪、悉皆消滅、諸禅定三昧、自然現前」（『天台小止観』）

[21]「摂心」を行う目的について、前掲注 20 に取り上げた「摂心為戒、因戒生定、従定発慧」（『首楞厳経』）や「汝等比丘、求善知識、求善護助、無如不忘念。若有不忘念者、諸煩悩賊則不能入。是故汝等、常当摂念在心。汝等比丘、若摂心者、心則在定。心在定故、能知世間生滅法相」（『仏拾教経』）に説かれた内容を参照。

間感情の「憂」と「喜」に対する捉え方を打ち出している。

句題：憂喜皆心灰[22]

和歌：かなしきも　うれしきことも　大かたは　こころのはひと　成りぬべらなり[23]

―『大江千里集』 述懐部 109 番

句題原拠詩：

巫峡中心郡、巴城四面春。

草青臨水地、頭白見花人。

憂喜皆心火、榮枯是眼塵。

除非一盃酒、何物更關身。

―『白氏文集』「望春」巻十八　1158

当該歌の句題は、「憂」と「喜」は共に「心灰」だと述べたものである。「心灰」は『漢語大詞典』によれば、「仏教用語。心中的世俗雑念」とあって[24]、心の中にある世俗的な雑念を指す。即ち、句題は、「憂」といい、「喜」といい、いずれも心中の世俗

[22] 109 番歌の句題における「心灰」という語は、原拠詩では「心火」であるが、『千里集』の諸本ではすべて「心灰」と記されている。

[23] 109 番歌の本文は書陵部本に拠るものである。伝寂蓮本で、109 番歌の本文は「かなしきも　うれしきことも　おほかるを　こころひとつぞ　なたつかりける」と記されている。109 番歌の本文について、伝寂蓮本と書陵部本との相違は下の句（第四句・第五句）にある。書陵部本の第四句「こころのはひ（灰）と」は句題の「心灰」に対応しているが、伝寂蓮本の第四句「こころひとつぞ」では句題との対応を見ることができない。ちなみに、『白氏文集』では巻十八・一一四七「冬至夜」に「心灰」の語句を用いた詩があり、当該詩の「心灰」の語句は『千里集』の 60 番歌が次のように句題として引用している。句題：心灰不及爐中火　和歌：ものを思　こゝろははひと　くだくれど　あつきおきには　およばざりけり(冬 60 番)

　ここに掲げた通り、60 番歌では句題の「心灰」と対応する歌句として第二句に「こゝろははひ（灰）と」と記されている。また、伝寂蓮本の第五句「なたつかりける」も文意不通である。以上の諸点を踏まえて、本稿では、109 番の本文について、書陵部本の「かなしきもうれしきことも大かたは　こころのはひと成りぬべらなり」に拠ることにする。

[24] 羅竹風『漢語大詞典』（縮印本）中巻（漢語大詞典出版社、1997年4月、4225頁）

的雑念に過ぎないという意味であり、「憂」と「喜」を見極める諦観的な態度を示し、仏教的雰囲気が濃く漂っているものとなる。

句題に基づいて詠まれた 109 番歌は、句題との対応関係からすると、第一句の「かなしき」と第二句の「うれしき」は、それぞれ句題の「憂」と「喜」に照応する。「皆心灰」に相当する表現としては「こころのはひと成りぬべらなり」が該当する。主旨は、悲しいことも嬉しいことも、全部心中の世俗的な雑念のように思われる、ということであり、句題と同じく、諦観的な態度をもって「憂」と「喜」を観じる。こういった「憂」と「喜」に対する諦観的な態度の根本には、仏教の「五蘊無常」という教説に立脚して打ち出された捉え方があると思われる。

仏教では、人間の存在が物質と精神との両面から五つの構成要素に分けられる。即ち、「五蘊」という概念である。「五蘊」とは、「色蘊」「受蘊」「想蘊」「行蘊」「識蘊」の五つを指す。そのうち、「受蘊」は人間の感情、感覚のことであり、句題にある「憂」と「喜」、そしてそれを翻案した和歌の「かなしき」と「うれしき」は、いずれも「受蘊」の範疇に属しているものと言える。これらの「五蘊」について、仏教では、「五蘊」は変化し、無常であり、無常であるものが思い通りにならない、と説く[25]。それをふまえて、句題と和歌を見てみると、そこに「憂」と「喜」が思い通りにならないとする直接的な表現は見られないものの、「憂」と「喜」という自分の思い通りにならない感情を心中の煩悩、あるいは心中の世俗的雑念にすぎないと捉える諦観的な態度は、人間感情の無常を自覚したうえで打ち出される対処法であると解することが可能であろう。

次の 115 番歌に見られるのは人生の儚さへの対処である。

---

[25]「五蘊無常」という理念について、仏教経典には「色即無常、無常即苦」、「如是受、想、行、識無常、無常即苦」(『雑阿含経巻二、解脱経』) との教説が見られる。そして、『雑阿含経』に説かれた「無常即苦」に対する理解は、羽矢辰夫「『無常・苦・非我』に関わる教説における苦の意味」(『創価大学人文論集』第 30 号、2018 年 3 月) における「無常であるものは思い通りにならない」という解説を参照。

句題：夢中歓笑又勝愁

和歌：夢にても うれしきことを みるときは たゞにうれふる[26] 身にはまされり

―『大江千里集』 述懐部 115 番

句題原拠詩：

留春不住登城望、惜夜相将秉燭遊。

風月萬家河両岸、笙歌一曲郡西楼。

詩聴越客吟何苦、酒被呉娃勧不休。

従道人生都是夢、夢中歓笑亦勝愁。

―『白氏文集』「城上夜宴」巻五十四 2469

当該歌の句題は「夢中の歓笑も憂愁に勝れり」という意である。この句題の背後について、雋雪艶氏は「『及時行楽』の思想があり、それは人生の儚さを自覚した古代の中国人の身の処し方を示す典型的な表現である」と指摘している[27]。では、実際に句題の原拠詩を確認してみよう。

句題の「夢中歓笑又勝愁」は第八句にあり、第七句の「従道人生都是夢」の内容を受けて展開されている。第七句の「従道人生都是夢」では、「人生」を「夢」に譬えることで、人生の儚さが強調されている。それを受けて、第八句の「夢中歓笑又勝愁」では、人生そのものははかない夢であるから、憂愁に閉ざされるより、楽しく過ごすべきだという主張が展開されている。この句題を踏まえて詠まれた和歌も人生の儚さを自覚し、対処法を打ち出すものとなっている。ただ、和歌に置かれている重点は句題とは僅かな相違がある。原拠詩は計八句からなる律詩であり、その中から「夢中歓笑亦勝愁」の一句が句題に選ばれた。この句が選ばれたことで、原拠詩にうかがえる

[26] 底本の伝寂蓮本は「ここにちりくる」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』に拠って、「たゞにうれふる」に改めた。

[27] 雋雪艶『藤原定家「文集百首」の比較文学的研究』（汲古書院、2002 年 2 月、330 頁）

「及時行楽」という思想の「人生は夢のようにはかない」という前提は後景に退くこととなる。その結果、和歌の「ゆめ」は人生の比喩という意味が希薄化し、現実と対比されるものとしての意味が前面に出てくることになっている。和歌の意を解しておけば、たとえ夢であってもうれしいことを見るのは現実の我が身を嘆くより良い、といったものになるであろうか。このように、原拠詩に比して和歌では、悲嘆に沈み込まないという対処法に比重が置かれているのである。

以上の三首は、無常を克服しようとする姿勢がうかがえる歌となる。前に掲げた心と身の不安定感、人生や世の儚さなどの無常を嘆く四首の歌に対して、これらの三首の歌には、無常を嘆く感傷的な心情が見られない。その代わりに、仏道修行者的な姿で修行に専念することによって、無常による心身の不安定感をはらい、無常を前に悲嘆に耽るのではなく、諦観的な態度をもって憂と喜を観じるといった無常を超克しようとする対処が打ち出される。また、句題との関係から見ると、この三首の歌には、109 番と 115 番歌の趣旨は概ね句題と同様であるが、104 番歌は句題から乖離し、句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭する。こういった句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭する姿勢が、107 番の歌にもうかがえる。では、107 番歌を見てみよう。

句題：何獨朝々暮々閑

和歌：はかなくて いつも我身の ひとりして あしたゆふべに しづかなるらむ[28]

[28] 当該歌について、底本の伝寂蓮本は「はかなくていつも我身のひとりしてあしたゆふべにしつこゝろなき」とする。第五句は「しつこゝろなき」と記される。「しつこゝろなき」は「静心無き」と解し、「あわただしい」の意になる。詳しくは本文で述べるが、句題の「何獨朝朝暮暮閑」は『白氏文集』巻十三所収の「長安閑居」の一節から取られており、原拠となった詩では、「長安のような町中に住んでいながら、どうして一人だけ朝となく夕方となく閑静な気持ちでいられるのか、それを怪訝に思わぬ者は無い」という文脈を作っている。したがってその原拠詩を句題として詠まれた歌もまた、「あわただしくない」をかたどっていると判断される。そのため、第五句の「しつこゝろなき」を誤写と見て、『千里集全釈』によって「しづかなるらむ」に改めた。

―『大江千里集』 述懐部 107 番

句題原拠詩：

風竹松煙昼掩關、意中長似在深山。

無人不恠長安住、何獨朝朝暮暮閑。

―『白氏文集』「長安閑居」巻十三 665

当該歌の句題は原拠詩の第三句「無人不恠長安住」と共に、詩の主旨を述べる部分である。意味は「誰でも私に会う人は『長安のような町中に住んでいながら、どうして一人だけ朝となく夕方となく閑静な気持ちでいられるのか』と怪訝に思わぬ者は無い」となる[29]。句題に切り取られた「何獨朝朝暮暮閑」は、賑やかな長安でも静かに暮らせるのは自分一人だけであると誇るニュアンスを含み、閑居の生活に満足する気持ちを示す。当該句を踏まえて詠まれた歌を見ておくと、初句の「はかなくて」は句題になく、新たに添加された語である。また、初句以降の「いつも我が身の　ひとりして　あしたゆふべに　しづかなるらむ」は句題と対応する表現であるが、歌意は、いつも我が身一人で、どうして朝も夕も静かに暮らしているのだろうというものであり、閑居の生活に満足する気持ちを示す句題に比して、単に独りで静かに暮らしている様子を述べるにとどまっていて、閑居に満足する気持に言及せず、趣を異にする。では、初句の「はかなくて」という新たに添加された語は、歌にどんな雰囲気を付け加えるのかについて確認してみよう。ちなみに、「はかなくて」という語は、『千里集』における六十二番の歌にも見られる。六十二番の句題と和歌は次の通りである。

句題：年々只是人空老

和歌：とし々しと　かずへこしまに　はかなくて　人はおいぬる　ものにぞ

[29] 岡村繋『新釈漢文大系第 99 巻 白氏文集（三）』（明治書院、1988 年 7 月、69 頁）

ありける

―『大江千里集』　冬　62 番

当該歌では、「はかなくて」という語は句題の「空」と対応し、むなしいという意を表す。また、『躬恒集』の歌「なくとても花やはとまるはかもなくくれゆく春のうぐひすの声」（403 番・凡河内躬恒）には、「はかなくて」と同義である「はかもなく」という語が見られる。この「はかもなく」という語について、藤岡忠美・徳原茂実両氏の校注によれば、「むなしく」という[30]。なお、唐木順三氏は、「はかなし」という語が示している心理について、「いたづら」、「つれづれ」と説明している[31]。以上の解釈を踏まえて、歌にある「はかなくて」はむなしく、つれづれなるという心理状態を表すと解される。和歌全体は、むなしくて、いつも我が身は一人で、どうして朝も夕も静かに暮らしているのだろう、という意になり、むなしい雰囲気が漂っている。これは句題に示された閑居に対する満足する気持ちと趣を異にすると考えられる。

あらためて句題原拠詩を顧みてみよう。句題の前にある「風竹松煙昼掩關、意中長似在深山」は「風にそよぐ竹や松葉をたく煙の中で、昼も門をかけて閑居していると、心の中は深山で隠居しているよりも素晴らしい感じだ」という意である[32]。要するに、外出せず、独りで幽閑を楽しんで暮らしている生活を描写したものであり、これは明らかに老荘思想が唱えた外物によって煩わされることのない境界を楽しんで、到達した閑適自得の境地である。すなわち、句題には老荘的閑居による閑適の気分心境のみが表され、むなしいという雰囲気が含まれていな

[30] 藤岡忠美・徳原茂実『私家集注釈叢刊 14 躬恒集注釈』（貴重本刊行会、2003 年 11 月、285 頁）
[31] 唐木順三「はかなしといふ言葉」（『唐木順三全集・第 7 巻』、筑摩書房、1967 年 12 月、11 頁）
[32] 岡村繁『新釈漢文大系第 99 巻 白氏文集（三）』（明治書院、1988 年 7 月、68～69 頁）

い。このように見てくると、和歌は、句題の持っていた老荘的閑居による閑適の気分を払拭し、独りで暮らしているむなしさを詠むものとなる。

次に、106 番の歌を見てみよう。

句題：心似虚舟浮水上

和歌：こころをし あまのうきぎに なしつれば ながるるみづに こころまされり

—『大江千里集』 述懐部 106 番

句題原拠詩：

隨縁逐處便安閑、不住朝廷不入山。

心似虚舟浮水上、身同宿鳥寄林間。

尚平婚嫁了無累、馮翊符章封却還。

處分貧家残活計、疋如身後莫相關。

—『白氏文集』「詠懐」巻六十五 3232

当該句題の意味は心が虚舟のように水上に浮かぶということである。『漢語大詞典』によれば、「虚舟」には「人事漂忽、播迁无定（落ち着かなく、不安定）」というネガティブな意味と「任其漂流的舟楫（流れる水に任せて、繋がらない舟）」というポジティブな意味がある。原拠詩の文脈を見てみると、句題の前に置かれている「随縁逐処便安閑、不入朝廷不入山」は「機縁のままに従えば、どこにいても安楽なものだ、朝廷にもとどまらず山に隠居することもない」[33]という意であり、これは要するに（現実に抵抗せず）機縁に従って、「中隠」の生き方で安楽に暮らすことを主張する。それゆえ、それに続く句題にある「虚舟」は流れる水に任せて、繋がらない舟のことというポジティブな意味を指すと解される。こうして見ると、句題の趣旨は、（現実に順応し）

[33] 岡村繁『新釈漢文大系 107 白氏文集（十一）』（明治書院、2015 年 9 月、359 頁）

何のこだわりもなく、自由な心の有り様を詠むところにあると言えよう。和歌では、「心似虚舟」は「こころをしあまのうきぎになしつれば」に詠み替えられる。句題の「虚舟」に対応する「浮木（うきぎ)」は『日本国語大辞典』(第 2 版、小学館、2007 年）によれば、「船、またはいかだ。うけき」などの意となる。そして、「浮水上」が「なかるるみづにこころまされり」と詠まれる。和歌は、私は心を舟と思いなして、繋がずに流れる水に任せる、こういうこだわりがない心の持ち方がより自由だと感じる、という意である。句題と同じく、千里の眼目もこだわりがなく、自由な心の持ち方を強調するところにあると思われる。

次の二首は老を嘆くものである。

句題：心更老於身

和歌：世中を おもひしりぬる こころこそ 身よりはすぎて おいまさりけれ

—『大江千里集』 述懐部 105 番

句題原拠詩：

似玉童顔盡、如霜病鬢新。

莫驚身頓老、心更老於身。

—『白氏文集』「答友問」巻十四 792

句題：素鬢俄頃変春華

和歌：くろかみの しろくにはかに なりぬれば はるのはなとぞ みえわたりける

—『大江千里集』 述懐部 113 番

句題原拠詩：

聴秋蟬。秋蟬悲。

非一處。細柳高飛夕。

長楊名月曙。

（略）

紅顔宿昔同春花。

素鬢俄頃變秋華。

中腸自有極。

那堪教作轉輪車。

―『初学記』「聴鳴蟬詩」巻三十蟬第 12 顔之推

105 番の句題は身と心を対比させることで、身より心の方がもっと年老いたことを詠むものである。和歌の主題は句題とほぼ同じであり、表現上も概ね句題を直訳する。ただ、「こころ」の前に「世中をおもひしりぬる」という表現が付け加えられることによって、身よりも心の経験値に比重が置かれるようになっている。113 番の句題では、髪の毛が白くなることが春の花に喩えられる。和歌においても、髪の毛が白くなったことを「はるのはな」の白さで喩えることで老いを表現する。

最後に、114 番の歌を見てみよう。

句題：恩光春景去

和歌：我が君も 春のひかりに ひとしくは くさきなる身と[34] 知りぬべらなり

―『大江千里集』 述懐部 114

当該歌の出典は不明であり、本稿では句題原拠詩を掲げることができない。句題の語句が表示する意味から考えると、「恩光」は『漢語大詞典』の解説により、「恩沢」を指す。そこに取り上げられた漢詩文の用例[35]から見れば、「恩光」は君主からの恩恵

[34] 底本の伝寂蓮本は「さきなる身とも」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』によって「くさきなる身と」に改めた。

[35]『漢語大詞典』に取り上げられた漢詩文の用例は「大王惠以恩光、顧以顔色」（江淹 『獄中上建

を形容するように用いられる。「春景去」という語は中国唐代中期の詩人劉禹錫の『送春曲三首』にある「春景去、此去何時回。遊人千万恨、落日上高台。寂寞繁花尽、流鶯帰莫来」の句に見られる。そこでは、「春景去」は春の景色が過ぎ去ったことを表す。この二つの語を結びつけてみると、句題は主君の恩寵が過ぎ去った春の景色のように無くなったことを嘆くと解される。和歌では、前半の「我が君も春のひかりにひとしく」に仮定を表す係助詞「は」が付け加えられている。後半の部分は全て、新たに添加された表現である。和歌の意味は、我が君の恩恵が春の光に等しいものならば、我が身はその春の光に照らされる草木と同じであることを知っているようだ、となるであろうか。恩寵を失うことを嘆く句題に対して、和歌では主君の恩恵を謳う雰囲気が感じられる。ちなみに、こういった主君の恩恵をめぐって展開される歌は述懐部では当該の一首だけである。但し、詠懐部には多く見られる。第三章で詳述する。

以上、『千里集』の「述懐部」に収められた和歌と句題を分析してきた。全十二首のうち、心と身の不安定感、人生や世の儚さなどのような無常を嘆く歌は四首、これらの無常観への克服を詠む歌は三首あった。また、独りで暮らしているむなしさ、こだわりがない心の持ち方、や主君の恩恵を謳う歌はそれぞれ一首があった。老を嘆く歌は二首見られる。全体的に見れば、「述懐部」に詠まれる「所懐」とは、千里が自分の内面を凝視し、そこに潜んでいる我が身、人生、世の中に対する認識、即ち、感傷的な詠嘆と超然たる態度を基調とする人生観や処世観である。また、この「述懐部」における十二首の歌の趣旨は概ね句題と同様であるが、104 番と 107 番の二首には、句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭するような方向性がうかがえた。では、千里はなぜ歌を詠む際に、句題が持っている老荘思想的な閑適の気分を払拭していくのか。この問題について、次節では検討を加えていきたい。

平王書』）や「如臣寵荣、豈足為諭、慚惶踊躍、進退難安、拜受恩光、戦汗交集。」（元稹『為蕭相謝告身状』）である。

3. 述懐歌の句題に対する乖離

大江千里はなぜ歌を詠む際に、句題が持っている老荘思想的な閑適の気分を払拭したのか。この問題を考えるにあたって、次の二点に留意する必要がある。一つは、『千里集』が勅命を受けて公的に献上された歌集であること。もう一つは、述懐歌という名称から分かるように、この部立てに収められているのは千里自身の「所懐」が述べられた歌であるということ。要するに、『千里集』の述懐歌に込められた「所懐」とは天皇に読まれることを前提としているのであり、換言すれば、その「所懐」は天皇に知られても差し支えないものとして詠出されているのだと言える。

さて、このように考えてくると、『千里集』が献上される以前の時代状況において、果たして公的な場では老荘思想が如何に考えられ、受容されていたのかについて顧みておく必要があろう。

前節で既に述べたように、104 番、107 番歌の句題に示された老荘的な閑居の具体的な有り様として、外界を離脱し、独りで一日中幽閑を楽しむという隠遁者的な身の処し方があった。こういった身の処し方について参考になるのが、白居易の「与元九書」（『白氏文集』巻二十八・1486）に見える「諷喩詩、兼済之志也。閑適詩[36]、謂之独善之義」という一節である。これは、白居易が友人である元稹に送った手紙の中に見えるもので、これによれば、閑適を求める隠遁者的な身の処し方は、社会や人民の救済を責務とする「兼済」の志と相反し、個人の快楽を追求する「独善」の義から由来す

[36]「与元九書」で言う「閑適詩」は白居易自身が分類した『白氏文集』「閑適」詩の部に収載される詩を指す。本稿に取り上げられる 104 番歌の句題原拠詩は雑律部に収載されているが、埋田重夫氏は「白居易の閑適詩は①「白氏文集」巻五～巻八までの“閑適”の部に収載される作品群（0175～0391）、②詩題や詩文に「閑」「適」を詠う作品群、③「安」「穏」「慵」「幽」「暖」「飽」……などのいわゆる閑適的気分（独善自足の境地）を詠う作品群という三つに分類できる」（『白居易研究―閑適の詩想』汲古書院、2006 年 8 月、27 頁）と指摘する。埋田氏の指摘によれば、104 番の句題原拠詩は内容からすると、明らかに閑適詩の範疇に属していると思われる。

るというのである。即ち、句題に示された老荘思想に基づいて、閑適を求めることは「兼済」と相反する独善的な生活態度と言える。『千里集』が献上される以前の時代状況において、こういった「兼済」と相反する独善的な態度は政治を掌る立場の人々にとって否定されていたようである。

日本における「独善」と「兼済」の関係について、大曽根章介氏は、葛井広成の対策文「竊以。玄[37]以独善為宗。無愛敬之心。棄父背君。儒以兼済為本。別尊卑之序。致身尽命」(『経国集』巻二十）などを例としつつ、奈良時代では「独善」を老荘思想、「兼済」を儒教思想と峻別したうえで、「独善」を否定視していたと説く[38]。なお、このような価値観、すなわち、老荘思想を独善的と見做し、有害であるとして否定する考え方は平安末期まで続いていたとされる。武内義雄氏によれば、「平安朝から鎌倉時代ころに至るまで広く詠まれた老子は河上公註、荘子は郭象註であった」とし、河上公註は「独善主義全生保身主義」であり、郭象註は「清言をもてあそんでいるもの」という評価であったと指摘し、「平安朝時代に入っても、老荘は神仙家清談家流の範囲を脱せず、依然として大学の教課には加えられていない」と説く[39]。これら諸氏の指摘するように、老荘思想は独善主義と思われるため、公的な場では忌避されていた可能性があると言える。

ここまでに確認してきたことを踏まえると、千里が句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分を歌から払拭したのは、当時の日本において、老荘思想が国家政治に害あるものとして否定されていたという時代状況を考慮してのことであったと想定される。

---

[37]「玄」は老荘思想を指す。
[38] 大曽根章介「『兼済』と「独善」―隠逸思想の一考察」(『仏教文学研究』第 8 巻、1969 年 7 月）
[39] 武内義雄「日本における老荘学」(『武内義雄全集　第 6 巻（諸子篇 1)』、角川書店、1979 年 1 月、230 頁）

4. 終わりに

本稿の冒頭で述べたように、『千里集』には「述懐」という部立てが設けられている。「述懐」を和歌の部立てとして採用したのは『千里集』が嚆矢となる。「述懐部」には歌が十二首ある。部立ての名称からすると、「述懐」とは「自分の思ひをのべる。所懐をのべる」という意である。果たして、千里が「述懐部」に込めた「所懐」とはいかなるものであるか。従来の研究では、「述懐部」については、あまり注目されてこなかった。「述懐部」を中心とする論は管見の及ぶ限り、皆無である。また、「述懐部」に言及する論があったとしても、それらの論では、「述懐部」に込められた「所懐」は、「詠懐部」と一括にして不遇の訴えとして把握されてきた傾向にある。

こういった先行研究の状況に対して、本稿では、「述懐部」に収められる和歌と句題を分析し、そこに詠まれる千里の「所懐」を考察した。その結果、以下のような見解を得るに至った。

『千里集』の「述懐部」には歌が十二首ある。全十二首のうち、心と身の不安定感、人生や世の儚さなどのような無常を嘆く歌は四首、これらの無常観への克服を詠む歌は三首あった。また、独りで暮らしているむなしさ、こだわりがない心の持ち方や主君の恩恵を謳う歌はそれぞれ一首があった。老を嘆く歌は二首見られる。全体的に見れば、この「述懐部」に詠まれる「所懐」とは、千里が自分の内面を凝視し、そこに潜んでいる我が身、人生、世の中に対する認識、即ち、感傷的な詠嘆と超然たる態度を基調とする人生観や処世観であり、これらは千里の内面の吐露と言える。「詠懐部」に詠まれる不遇の訴えと趣を異にしていると考えられる。

また、出典となった『白氏文集』との関係について付言しておこう。前にも述べたが、「述懐部」の歌は殆ど『白氏文集』の漢詩を句題としているが、『白氏文集』には「述懐」を題とする漢詩が一首もない。なお、出典となった漢詩の所収先は『白氏文

集』の巻十三から巻六十五にわたって散在していて、特定の巻に偏っているわけではない。千里は果たして、いかなる基準で『白氏文集』所収の漢詩から句題を選び、そして、その句を句題として歌を詠出したのか。以上の「述懐部」に詠まれる「所懐」に関する分析を踏まえて考えると、千里は自分の内面に潜んでいる我が身、人生、世の中に対する認識を以て、『白氏文集』から句題を選び、そして、その句題をもとにして和歌を詠んで、自分の人生観や処世観を吐露する、と言えようか。但し、「述懐部」の歌は単なる句題の翻案にとどまるものではないという点について指摘しておきたい。すなわち、「述懐部」には、句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分が、歌では払拭されているという方向性が見られる。なぜ、千里は述懐歌を詠む際に、句題の持つ老荘思想的な閑適の気分を払拭したのか。それは、奈良時代から平安時代にかけて、老荘思想が独善的と見做され、政治を掌る立場の人々からは有害なものと否定されていたという歴史的状況と深く関わっている。即ち、千里が句題の持つ老荘思想的な閑適の気分を述懐歌から払拭したのは、当時、老荘思想が国家政治に害するものとして否定されていたからであるという時代状況を考慮してのことであったと想定されるのである。

第三章

『大江千里集』の「詠懐部」に関する考察

―その表現手法に着目して―

1. はじめに

『大江千里集』には「詠懐」という部立てが設けられている。「詠懐」という語は、日本の漢詩集や和歌集では、『千里集』のほかに見ることができない。それに対して、中国の詩文集では、「詠懐」が詩題として古来より詩人たちに愛用されてきており、『文選』では「詠懐」という詩題を示し、江淹の「阮步兵籍詠懐」と阮籍の「詠懐詩」十七首を所収する[1]。また、『白氏文集』にも「詠懐」を題とする詩は少なくない。しかし、『千里集』における「詠懐部」の歌はそれ以外の部立ての歌とは異なり、句題を伴っておらず、それらは「別亦自加自詠十首」(『千里集』序文）として構成される十首の和歌のことを指す。これは他の部立てに比して、千里が詠懐部に並々ならぬ関心を持っていたことを示していると想定される。では、詠懐歌として収められたこれら十首の歌は、『千里集』の中でどのような位置付けであったのか。この件に関しては、先行研究が積み重ねられてきた。例えば、山口博氏は、千里は詠懐歌十首に我が身の不遇を訴える意を込めたと指摘する[2]。小野泰央氏は山口博の説を踏まえて、詠懐歌に千里の不遇を天皇に訴える意が込められていることを認めた上で、漢詩文表現も有すると指摘する。そして、「漢文は官人の文章である」としつつ、千里が「詠懐部」で漢詩文表現を用いるのは、官人としての「不遇感を奏上するという切迫した状況下にあったが故」であると推測する[3]。また、木村尚志氏も「詠懐部」の歌に「昇殿を許されない身の不遇の愁訴が見出せる」と述べる[4]。

以上、『千里集』の「詠懐部」に関する先行研究を概観してみたところ、「詠懐部」

---

[1] 藤井良雄「昭明『文選』における「詠懐」の成立について」(『福岡教育大学紀要』第 1 分冊 42 号、1993 年 2 月）

[2] 山口博『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』(桜楓社、1973 年 1 月）

[3] 小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」(『和歌文学研究』第 76 号、1998 年 6 月）

[4] 木村尚志「述懐歌の歴史」(『東アジア日本語教育・日本文化研究』第 13 号、2010 年 3 月）

に収められた歌については、主題上、集中的に不遇が詠まれていること、及び、漢詩文表現を有することと指摘されてきたことが分かる。これらの見解について、論者も同様の立場に立つことになる。但し、「詠懐部」に詠まれる不遇は、概ね事物を介するかたちで導かれているという表現手法上の特徴を本稿では指摘しておきたい。ちなみに、前章（第二章）の「述懐部」の歌に関する分析から、「述懐部」に詠まれる「所懐」は、率直に述べられる傾向にあることが明確に読み取れる。比喩表現を使った歌があるが、歌では「所懐」があくまでも主体であり、比喩表現が「所懐」をより詳しく表現するために存在するものであり、修飾的な役割のみを担っている。では、果たして、千里はなぜ「詠懐部」では事物を介して、不遇という「所懐」を間接的、婉曲的に述べるのか。

本稿は、以上の問題意識に基づいて、次節以降では、「詠懐部」に収められた歌の表現手法を分析し、そして、その表現手法には千里のどのような意図が働いているのかについて、当時の時代状況を踏まえつつ検討する。

2.『千里集』における「詠懐部」の表現手法

『千里集』の「詠懐部」には歌が十首あり、歌で素材として用いられる「物」を分類してみると、次のようになる。

<table>
<tr><td>素材</td><td>帰雁</td><td>草</td><td colspan="2">波</td><td>鶴</td><td>天雲</td><td>太陽</td><td colspan="2">季節</td><td>鶯</td><td>時鳥</td></tr>
<tr><td>番号</td><td>116</td><td>118</td><td>119</td><td>124</td><td>120</td><td colspan="2">121</td><td>117</td><td>122</td><td>123</td><td>125</td></tr>
</table>

このうち、事物に千里自身の姿を重ねた歌は 116 番、118 番、120 番、123 番である。

これらの歌で、「雁」「草」「鶴」「鶯」はそれぞれ千里自身を象徴する表現となっている。具体的に見てみよう。

くもわけて[5] みやこたづねに くる雁も 春にあひてぞ とびかへりける

---『大江千里集』 詠懐部 116 番

116 番の歌で歌材となっている雁は秋になるとやってきて、春に北へ帰る渡り鳥である。歌における「雁も春にあひて」について、『千里集全釈』は「あの雁でさえも春にあって帰るのだから、この私にも春にあう機会を与えて欲しい」と解釈する[6]。このように春という季節が何らかの機会の隠喩として用いられる和歌は千里の詠歌以外にも多く見出すことができる。例えば、「霜枯れに見えこし梅は咲きにけり春には我が身あはむとはすや（『拾遺和歌集』巻第十七・雑秋　1155 番）」、「たらちねの跡や昔に荒れなましおどろの道の春に遇はずは（『玉吟集』（一）・雑十五首 896 番）」などが挙げられる。これらの歌では、「春」は官位昇進の季節として用いられている[7]。ここで取り上げている 116 番歌の「春」も昇進の季節という含意が認められよう。表面上、春になって帰るという雁の習性が詠まれているが、そこには千里の気持ちが含まれている。彼は春の帰雁に自身をなぞらえつつ、昇進を望む自己を表現しているのである。

はるのみや はなはさくらん たにさむみ うづもるくさは ひかりをもみず

---

[5] 底本の伝寂蓮本は「しもわけて」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』によって、「くもわけて」に改めた。

[6] 平野由紀子·千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、2007 年２月、259 頁）

[7]『拾遺和歌集』からの用例における「春」に対する理解は「春の到来を予感する。不遇から栄進への転換の時期の暗示と解したのである」との解説（新日本古典文学大系 7『拾遺和歌集』小町谷照彦校注、岩波書店、1990 年１月、331 頁）を参照。『玉吟集』からの用例における「春」に対する理解は「親が残した足跡は昔のこととなって荒れてしまったであろう。もしも公卿になれたという春に遇わなければ」との解説（和歌文学大系 62『玉吟集』久保田淳、明治書院、2018 年１月、116 頁）を参照。

――『大江千里集』 詠懐部 118 番

当該歌にある「春」も官位昇進の季節として捉えてみたい。その官位昇進の機会に「宮」に集う人々は「花」を咲かせている。つまり、昇進を果たしているのである。一方、「たに」にはその春がまだ訪れず、冬の寒さが残っているようだとして、その「たに」に埋もれている「くさ」は春の「光」を見ることがない、と詠まれている。前章（第二章）で触れた 114 番歌では天皇の恩恵が「光」に喩えられていたことをここで顧みておきたい。千里はこの谷に埋もれ、光を見る機会を逸している草に自身をなぞられていると解しておく。谷に埋もれる草が太陽の光を受けることがないという自然界の現象を媒介にして恩恵が届かない身を暗喩的に詠み込んでいるのである。

あしたづの ひとりおくれて なくこゑは くものうへまで きこえつがなん[8]

――『大江千里集』 詠懐部 120 番

120 番の歌に見える「鶴」は『毛詩』「鶴鳴」篇を踏まえるものである。「鶴鳴」篇と同じく、当該歌では「鶴」の鳴く声が高らかという特徴が注目される。歌における「鶴」以外の表現について、田中智子氏は「「沢」＝沈淪・地下、「雲の上」＝天恩・殿上・天皇という寓喩の型が生まれたのである」と説明する[9]。こういった構図に沿って見れば、千里は鶴が持っている声が高らかという特徴に着目し、昇進が遅れる自身の姿をひとりおくれる孤鶴に重ね合せている。そして、「鶴」の声が雲の上に届くことを詠むことで、昇進が遅れる沈淪の身を帝に知って欲しいという気持ちを表現する。

[8] 底本の伝寂蓮本は「きこえつかなん」とするが、誤写と見て、『千里集全釈』に拠って、「きこえつがなん」に改めた。

[9] 田中智子「述懐歌の機能と類型表現：『毛詩』「鶴鳴」篇を踏まえた和歌を中心に」（『むらさき／紫式部学会』第 51 号、2014 年 12 月）

おもふこと なくうぐひすに つけたれば いろもかはらぬ われひとりてへ

---『大江千里集』 詠懐部 123 番

この歌は鶯が「色もかはらぬのは我ひとり」と伝えることを詠む。歌に詠まれる「鶯」、「色も変わらぬ」、「我ひとり」という三つの語の間にある関わりについて、『千里集全釈』は「鶯の色は褐色がかった緑色をしており、それと六位の官袍の色である深緑色を重ね合わせて、いつまでたっても昇進できず緋色の袍（五位）を着られない身を言ったものである」と指摘する[10]。この指摘に従うと、「色もかはらぬ鶯」は昇進が沈滞している千里の姿を象徴すると解することができる。千里は鶯の色と六位の官袍の色との類似性を切り口として、鶯の外見的特徴に言寄せ、低い官位から脱出できない身の憂愁を訴えるのである。

以上は千里が自身の姿を事物に重ね合わせる歌となる。次の五首は、千里が事物に託して自分の不遇を詠むものとなる。

あまぐもや 身をかくすらん 日のひかり わが身てらせど みるよしもなき

--『大江千里集』 詠懐部 121 番

前述の 118 番の歌と同じく、この歌に見える「日の光」も天皇の恩恵の喩えと解しておく。歌において千里は、日の光が余すところなく照らすという観念のもとに、雲によってその日の光が届かない我が身を詠み、恩寵が届かない自身の境遇を含意させる。

[10] 前掲注 6 書 266 頁

みやこまで なみたちくとも きかなくに しばしだになど 身のしづむらん

――『大江千里集』 詠懐部 124 番

しらなみの　たちかへりくる　かずよりも わが身をなげく ことはまされり

――『大江千里集』 詠懐部 119 番

この二首の歌はともに「波」を歌材とするものである。124 番歌の意味は、『千里集全釈』によれば、「都まで波が立って来ているとも聞いていないのに、少しの間でさえもなぜ（浮かばず）我が身は沈淪するのでしょうか」という[11]。この解釈を踏まえて、和歌の内容を理解してみると、都まで波が立ち来るとは聞いたことがないのに、実際に私は立ち来る波の影響を受け、その結果、波に沈むことになっている、という含意が読み取れる。また、当該歌については、群書類従本『句題和歌』補遺に「つみなかりしかども人の事につきてしはらく籠居すべきよしありしころ式部大輔のもとへこまやかに申しをくりしふみのおくに」との詞書がある点に留意しておきたい。この詞書を踏まえつつ、山口博氏は当時の千里の境遇について、「『罪なかりしかども』と断っているものの、事件に連坐して謫居した」と指摘する[12]。和歌の内容と千里の当時の境遇とを結び付けて考えると、この歌では、「立ち来る波」が事件に連坐した非運を暗喩的に表すものとして用いられると解することが可能であろう。千里は我が身が「立ち来る波」の影響を受け、その波に沈むと歌うことで、事件に連坐し、謫居に遭う沈淪の身を嘆いたのである。119 番の歌では海辺の波の繰り返し立ち返るという自然現象が千里の境遇を際立せるものとなっている。前半において白波が寄せては返すことを詠み、後半では我が身を嘆く回数がその白波の回数よりも多いと述べる。

[11] 前掲注 6 書 267 頁
[12] 前掲注 2 書 44 頁

はるごとに あひてもあはぬ わが身かな はなのゆきのみ ふりまがひつゝ

—『大江千里集』　詠懐部 117 番

としごとに はるあきとのみ かぞへつゝ 身はひとときに あふよしもなし

—『大江千里集』　詠懐部 122 番

この二首では、千里は春と秋を除目叙位が行われる季節とし、そして、季節が巡るという自然の規律に言寄せて、不遇を述べる。117 番の歌は抒情と叙景という二つの部分からなる。前半では「春ごとに」の後に「あひてもあはぬ」という表現を付け加えて、春が年ごとに巡っても我が身は昇進の機会に巡り会えないことを詠む。後半では、視線を春の落花に転じ、散る花を雪に見立てて、花が雪のように降り紛っていると感傷的に詠む。122 番の歌では、千里は「春秋」の後に「のみ」という副助詞を付けつつ、その時に会えない自分を詠み込む。歌の趣旨は、年ごとに春と秋の除目叙位だけを期待して数えながらも、なかなか人生の栄転に巡り会えない身の上を嘆くものとなろう。

ほとゝぎす さつきまたずぞ なきにける はかなくはるを すぐしきぬれば

——『大江千里集』 詠懐部 125 番

125 番の歌は『千里集』の最後の歌である。素材としての時鳥は通常、初夏の頃から鳴き始めているため、和歌ではその声が春の終わりを象徴するものとして詠まれる場合もある。当該歌でも、五月にならないのに時鳥が鳴き始めていることで、春を惜しむ気持ちが表されている。その春は「儚く」と修飾されており、千里にとって実の無いまま過ぎてしまった季節となったことがうかがえる。ここにも自身の不遇を読み取ることができよう。

以上、『千里集』の「詠懐部」に収められた歌の表現手法について分析してきた。以上の分析を通じて、千里は「詠懐部」で、事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自分の姿を投影し、自分の不遇を間接的、婉曲的に表出するという手法を取ったことが分かる。ちなみに、このような表現の手法は詠物詩の創作手法[13]に通じるものである。

では、なぜ千里は「詠懐部」で詠物的な手法によって、自分の不遇を間接的、婉曲的に訴えるのかが疑問である。次節で検討していく。

3. 公的な場や召歌における不遇の表出

千里はなぜ「詠懐部」で不遇を間接的、婉曲的に訴えるのであろうか。ここでは、千里の時代において、不遇を訴えるという主題がどのように詠まれたのかという問題について検討を展開し、見解を述べてみたい。

まずは、千里の時代にあって、不遇を訴えるという主題は公的な場でどのように思われたのかについて考えてみたい。律令制社会では身分秩序が厳密である。詩宴、歌合などの場は、通常、君臣によって構成されているものである。天皇臨席のこれらの場において不遇を述べることについて、滝川幸司氏は「詩宴で個人的な不遇を詠めば、極端に言えば、天皇以下の身分秩序への不満になってしまうのである。だからこそ、個人的な不遇が詠まれることは原則としてあり得ないのである」と指摘する[14]。即ち、

---

[13] 詠物詩の創作手法について、清代の詩論家李重華が『貞一斎詩説』で「詠物詩有両法：一是将自身放頓在里面、一是将自身站立在傍辺（拙訳：「詠物詩」には二つの創作方法がある。一つは自身をその中に入れるという方法である。もう一つは自身がその傍に立つという方法である。）」と述べる。「自身」は作者のことを指す。「里面」と「傍辺」の分界線は作者と「物」との関係に存在する。「将自身放頓在里面」とは作者が自身の気持ちや感情を「物」に託して表現することである。「将自身站立在傍辺」とは作者が傍観者の立場に立って、「物」の本来の特徴や性質を客観的に描写することである。『千里集』の「詠懐部」に使用する手法は「将自身放頓在里面」に通じる。

[14] 滝川幸司「宇多朝の文壇」（『奈良大学紀要』第 30 号、2002 年 3 月）

不遇を託てば、天皇以下の身分秩序への不満になるため、我が身の不遇を述べるというのは詩宴にふさわしいものではないということになる。そのような理由があるためか、野本瑠美氏も「歌合などの晴の場では不遇を嘆く述懐的な内容の和歌は長く忌避されてきた」[15]と説く。但し、大治三年（一一二六）に転機が訪れる。「西宮歌合」、「南宮歌合」、「住吉歌合」などで「述懐」が歌題として認められたことに伴い、不遇沈淪を詠む歌が徐々に歌合に頻出するようになっていくのである[16]。こうして概観してみると、不遇を訴えるという主題は千里の生きた時代にあってはまだ、詩宴、歌合などの公的な場で披露すべきものではないことが確認できよう。

次に、召歌において「不遇」がどのように詠まれたのかを考えてみたい。『千里集』が献上された宇多朝の召歌について、徳原茂実氏は「宇多帝は興風、千里、勝臣といった歌人たちに歌を奉らせている」と指摘しつつ、これらの歌人たちに献上された歌のうちに、「あしたづのひとりおくれてなく声は雲のうへまできこえつがなん（『古今集』　998 番　大江千里）」と「人しれず思ふ心は春霞たちいでて君が目にも見えなむ（『古今集』999 番　藤原勝臣）」は述懐的な歌であると述べている[17]。徳原氏の掲げる『古今集』の 998 番歌は『千里集』における「詠懐部」の 120 番の歌である。前述したように、この歌で千里は沈淪の身を「鶴」の声に託し、帝の耳に届いて欲しいと詠んでいる。また、藤原勝臣の歌も官位の昇進を願うものと解される。窪田空穂氏はこの歌にある「『思ふ心』は願いの意。この一つの願いは昇進を暗示させる。『春』は京の官人の定期の昇進の季節で、それを暗示している」と解説している[18]。やはり千里と同じく間接的な形を取って、事物を介して自らの不遇を天皇に訴えている。

時代を少し遡って宇多朝以前の召歌を顧みてみると、小野泰央氏は『古今集』撰進

---

[15] 野本瑠美「『久安百首』の「短歌」―長歌形式による述懐の方法―」（『島大国文』第 35 号、2015 年 3 月）
[16] 峯岸義秋「歌合における述懐の歌」（『東北大学教養部文科紀要』第 1 号、1958 年 3 月）
[17] 徳原茂実 「宇多・醍醐朝の歌召をめぐって」（『中古文学』第 26 号、1980 年 10 月）
[18] 窪田空穂『古今和歌集評釈 下巻』（東京堂、1960 年 6 月、171 頁）

以前の天皇に奉られた不遇歌として、「奥山の岩垣もみぢちりぬべし照る日のひかりみる時なくて（『古今集』秋下・二八二・関雄）」、「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき（『古今集』春上・八・康秀）」、「花の木にあらざらめども咲きにけりふりにしこのみなる時も哉（『古今集』物名・四四五・康秀）」、「わくらばに問人あらば須磨の浦にもしほたれつつ侘ぶとこたへよ（『古今集』雑下・九六二・行平）」などが挙げられるとし、これらの歌はいずれも不遇を間接的に表出したものであると指摘する。更に、「天皇に自らの不遇を直接訴える歌はやはり古今集時代以前には多くを見出すことはできない」とも説く[19]。

ここに確認してきた諸点を踏まえると、千里が「詠懐部」では、不遇を間接的、婉曲的に訴えるのは、当時において、支配的であった、直接的な不遇の表出を忌避する配慮が働いたと想定できよう。

4. 終わりに

本稿の冒頭で述べたように、従来の研究では、『千里集』における「詠懐部」の歌については、主題上、集中的に不遇が詠まれていること、及び、漢詩文表現を有することが指摘されてきた。本稿は、こういった先行研究を踏まえつつ、「詠懐部」の歌に詠まれる不遇は、概ね事物を介するかたちで導かれているという表現手法上の特徴を指摘した[20]。具体的に言えば、千里は「詠懐部」では事物の客観的な性質や現象などを描

---

[19] 小野泰央「中文としての和歌―十世紀歌人の不遇感と表現―」（『東洋文化』第 94 号、2005 年 4 月）

[20] 事物を介するという表現手法を考えるうえで参考になるのが鈴木日出男氏の提唱する「心物対応構造」という観点である。これは、「事物現象を表す言葉と心情を表す言葉がたがいに対応しあうことによって、歌中の〈心〉〈物〉いずれの言葉をも超えて新たなイメージを構築しうるというしくみ」を指す（鈴木日出男、『古代和歌史論』、東京大学出版会、2001 年 1 月、138 頁）。なお、この〈物〉と〈心〉の対応構造は時代の変遷とともに変化してゆくとする説もある。菊川恵三氏は、『万葉集』では物象が単線的に心象に掛かるのに対し、『古今集』では複線的な構造へと変化しているとして、その複線的な構造については「『物象』と『心象』を重ね合わせにする

きながら、そこに自分の姿を投影し、自分の不遇を間接的、婉曲的に表出するという手法を取ったと指摘してきた。そして、千里はこういった間接的、婉曲的な表現手法を用いて、不遇を述べる理由について、当時の時代状況を踏まえつつ検討した。実は、千里の生きた時代にあって、直接的な不遇の表出は詩宴、歌合などの公的な場において忌避されていた。天皇に奉る召歌においても、自らの不遇を直接的に訴えたものは古今集時代以前には多くを見出すことはできず、基本的に間接的な形を用いて自らの不遇を訴えるとされている。これらのことを考慮すると、千里が「詠懐部」で間接的、婉曲的な手法を用いて不遇を述べるのは、当時支配的であった、直接的な不遇の表出を忌避するという配慮が働いたと想定できよう。

ことにより、物象は物象にとどまらず、別な比喩性を持って心象表現をせりあげる」と説明する（「和歌文学教育の試み（一）：万葉・古今の物と心」、『名古屋大学国語国文学』第 64 号、1989 年７月）。『千里集』の詠懐部の歌に見られる表現手法も事物を介して所懐が導かれるというものであり、心物対応構造という観点から捉えることも可能であろう。そのすり合わせについては、時代的な変遷も含めて今後、検討していきたい。

第四章

『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法

1. はじめに

『大江千里集』は寛平六年（894年)、大江千里が編纂した和歌集である。大江千里が新たに歌集を作成するにあたり、漢詩の一節を句題として和歌を詠むという作歌方法を取った。これはいわゆる句題和歌というもので、やがて詠法の一つともなる。それゆえ、『大江千里集』は句題和歌の先蹤と位置づけられている。しかしながら、『大江千里集』は句題和歌の先蹤として和歌史に据えられているにも関わらず、その作歌方法自体については、長い間、句題を翻訳する傾向があると評価されてきた。

『千里集』に関する初期研究として、金子彦二郎氏は『千里集』の和歌はほとんど句題の翻訳であり、「未だ以て稚拙生硬の域を脱しきれぬ」と全体的な評価を下している[1]。また、山岸徳平氏は「『千里集』は作品として、まだ十分に芸術的な作品とならずに、直訳的になったり、その為に詩趣が乏しくなったり」すると述べる[2]。吉川栄治氏も同様な評価をし、「古句を引き写しした に過ぎない千里の歌は、詩に対して従属的な位置に甘んじているものと言わねばならない。そこには歌独自の創造はみられず、あるのは優美典麗な佳句の世界である」と述べる[3]。また、蔵中さやか氏も直訳の観点から、『千里集』は、「句題を超越することのない範囲で和歌を詠む。あくまでも、同じ情景を和漢両様の方法で表現することが目標」であると指摘する[4]。同様に、本間洋一氏は、『千里集』の歌について、「詩句に即応した直訳調のものが殆どで、和歌は詩句に従属するものであった」という評価をする[5]。川村晃生氏も、『千里集』の歌は

---

[1] 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇（増補版)』(培風館、1955年6月、396頁)

[2] 山岸徳平『和歌文学研究　山岸徳平著作集 II』(有精堂、1971年11月、153頁)

[3] 吉川栄治「大江千里集小考―句題和歌の成立をめぐって」(『国文学研究』第 66 号、1978 年 10 月)

[4] 蔵中さやか「『大江千里集』の歌風」(『甲南女子大学大学院論叢』第11号、1989年11月)

[5] 本間洋一「句題和歌の世界」(『和歌文学の世界　第 15 集　論集〈題〉の和歌空間』、笠間書院、1992年11月)

「句題の翻案歌的傾向を有する」と評する[6]。また、太田善之氏は、『千里集』は「漢詩句そのものの詠歌をし、漢詩句を内在する和歌を「新歌」の形式として立ち表した」と説く[7]。

一方で、佐山済氏は意訳の観点から、千里の和歌は「やはり、詩句をヒントにした一つの独立した歌としてみるべきであ」ると説く[8]。この佐山氏と同様の指摘が津田潔氏にもあり、即ち、津田氏は、『千里集』における句題と和歌の関係について、「如何に表現すれば新たな和歌文学として成立し得るのかという点を追求する」ものであるとし、また、「詩句をそのまま素直に訓み下そうとしているのではなく、あくまでそれを解釈して詠んでいる」という見解を示す[9]。関連して、半沢幹一氏は「『句題和歌』の和歌が句題に従属し、その表現が類型的である」にもかかわらず、「一首の和歌とするには、字数や音数律にとどまらず、一つの作品としての内容・表現のまとまりにまで、配慮・工夫を及ぼさなければならない」という千里の詠歌態度を指摘する[10]。そして、歌を一つの完結した作品として捉えるべく、『「句題和歌」の漢和＜接触＞ノート』[11]や、「釈論大江千里集」[12]を刊行してきた。また、平野由紀子・千里集輪読会による『千里集全釈』は、句題として引かれた詩句の出典となった原拠詩全体を示し、句題の意味を解説しつつ、各歌に逐語訳を施しており、漢詩句題から和歌に至る過程を提

---

[6] 川村晃生「句題和歌と白氏文集」(『白居易研究講座 第三巻 日本における受容（韻文篇)』、勉誠社、1993 年 10 月）

[7] 太田善之「『大江千里集』の歌学」(『学芸国語国文学』第 32 号、2000 年 3 月）

[8] 佐山済「古代の和歌と漢詩」(岩波講座『日本文学史』第三巻 古代 岩波書店、1959 年 6 月、17 頁）

[9] 津田潔「『大江千里集』に於ける白詩の受容について」(『國學院雑誌』第 80 巻 2 号、1979 年 2 月）

[10] 半沢幹一「『句題和歌』における和歌―その評価の見直しのために」(『伝統と変容』、ぺりかん社、2000 年 6 月）

[11] 半沢幹一『「句題和歌」の漢和＜接触＞ノート』(共立女子大学総合文化研究所、2005 年 2 月）

[12] 小池博明、半沢幹一「釈論大江千里集（一）～（十二)」(『長野工業高等専門学校紀要』51 号、2017 年 6 月、及び『共立女子大学文芸学部紀要』65 号、2019 年 3 月から連載され、現在秋・四十九番まで進行している）

示する。

つまり、以上の先行研究から分かる通り、『千里集』の作歌方法については、初期の「稚拙生硬」、句題を「直訳」するという消極的な評価から、句題を意訳するという積極的な評価に変転してきた。しかし、どちらかといえば、『千里集』の歌は全体的に句題を翻訳する傾向にあることは否定できず、それが定説ともなってきた。但し、近年では、能登敦子氏が『千里集』における一首の歌を取り上げて[13]、その作歌方法について、新しい見解を提出している。能登氏は「『千里集』は、句題和歌の形式を採りながら、実際の歌作にあたっては、句題以外の漢詩文（白居易や菅原道真の漢詩文など）をも利用する」と指摘し、九世紀当時の和漢交渉の有り様を歌作に記し留めている点で、『千里集』の評価は揺るがないと説く。従来の「句題の翻訳」説にとどまるのではなく、九世紀当時の和漢交渉という視点から、『千里集』の作歌方法を評価する上での新しい一側面を開拓していると言える。

本稿も『千里集』は、一方的に句題を翻訳するわけではなく、九世紀当時の和漢交渉という視点から、その作歌方法を捉え直そうとするものである[14]。その際、注目したいのは『千里集』における九十二番歌である。

---

[13] 能登敦子「『大江千里集』の方法」（『和漢比較文学』第 46 号、2011 年 2 月）。能登氏の論が取り上げたのは『千里集』における三十六番の歌である。三十六番の句題と歌は「秋来転覚此身衰」「大方の秋来るからに我が身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ」である。

[14] ちなみに、従来の和歌史の把握は『万葉集』から『古今集』へという視点から序詞、掛詞、見立てなどの修辞技法が論じられる傾向にあった。例えば、鈴木日出男氏は、万葉から平安和歌への展開を見るにあたり、「（万葉時代の）序詞は（『古今集』の）読人しらずの歌に非常に多く、逆に六歌仙にほとんどなく、再び撰者時代でかなり増加する。この傾向から六歌仙の新しい歌風、撰者らの尚古趣味がいわれる」と説く（鈴木日出男、『古代和歌史論』、東京大学出版会、2001 年 1 月、84 頁）。また、萩野了子氏は、「万葉集から古今和歌集へかけて、和歌は実にさまざまな要素において変化を遂げていったが、修辞技巧の変化の中で、最も注目すべきはやはり序詞である」としつつ、「万葉集で全盛を誇っていた序詞は、六歌仙時代に詠まれなくなり、撰者時代に復興される。万葉集歌の影響を大いに受けていた当代歌人達が、万葉集の代表的修辞の再現を試みる」と述べる（「心物対応構造の変質と序詞―万葉集を中心に」、『国語と国文学』第 87 巻 2 号、2010 年 2 月）。但し、平安時代の初頭には漢詩文隆盛の時期があり、したがって、漢詩文の影響も看過できないものがあったことは容易に推測される。近年では中村佳文氏が「和漢対峙」という視点を提供しているが（「『寛平内裏菊合の方法』―和歌表現の再評価―」、『国文学研究』第 158 号、2009 年 6 月）、本稿でも和漢の交渉に着目する点では中村氏と同様の和歌史的把握となる。

九十二番の和歌と句題は次の通りとなる。

句題：涙霑雙袖血成文

和歌：なくなみだ　こふるたもとに　かかりては　くれなゐふかき　あやとこそみれ

―『大江千里集』　離別　九十二番

当該歌の句題は涙が袖を濡らすという表現を用いて、離別の情を詠むものである。中国の漢詩において、涙は「衣・裳・衿・巾」をぬらすというのが多出するが、「袖」を濡らす例が極めて少ない[15]。しかし、日本の詩歌では、涙は「袖」を濡らすという表現がよく見られる。本稿では、九十二番の和歌を句題と比較して、両者の関係を明らかにする。そして、この和歌と句題との関係は日本の従来の詩歌とどのようなつながりがあるのかを検討する。そこから、歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘し、『千里集』の作歌方法に見解を提示する。

2. 九十二番の和歌と句題との比較

九十二番の和歌と句題を詳しく見ていこう。

句題：涙霑雙袖血成文

和歌：なくなみだ　こふるたもとに　かかりては　くれなゐふかき　あやとこそみれ

―『大江千里集』　離別　九十二番

[15] 神谷かをる「『涙』のイメジャリ―万葉集から古今集へ―」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　十三』、和泉書院、1993 年 7 月、137 頁）

九十二番歌の句題は『元氏長慶集』の巻十八に所収された「送致用」という漢詩の一節である。意味は目から流した涙が両袖を濡らして、血色の綾を成すとなる。即ちここに詠まれる袖を濡らした「涙」が「血涙」のことである。いうまでもなく、「血涙」という語は現実ではありえない誇張した文学表現である。「血涙」という語の使い方について、『辞海』では次のように解説される。

『韓非子・和氏』:「文王即位、和乃抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜、泣尽而継之以血」泣、涙。後称極度悲痛而流的涙為「血涙」。白居易『虢州刺史崔公墓志銘序』: 遂置笏伏陛、極言是非、血涙盈襟、詞竟不屈」亦借指極度惨痛或形容讐恨極深[16]。

これによれば、「血涙」は極度の悲しみ、あるいは極度の惨痛や讐怨のために流した涙とされる。句題の出典となる「送致用」は離別を主題とする漢詩である。そのため、句題に詠まれる「血涙」が離別による極度の悲しみのために流した涙を指すと思われる。それを踏まえて、句題は「血涙」が袖を濡らすという描写を通じて、極めて悲しい心情を表すと解せる。

千里が詠んだ歌を、試みに語句の面で句題と対応させてみると、初句の「なくなみだ」が句題の「涙」に即応し、「たもとにかかり」が意味的に「霑雙袖」に相当する表現と言える[17]。しかし、「たもと」を修飾する「こふる」が句題に見当たらず、これは新たに付け加えられた語であると判断される。また、歌の結句の「あやとこそみれ」

[16] 陳至立『辞海』第七版(上海辞書出版社、2020 年 8 月)

[17]「たもと」という語について、『日本国語大辞典』JapanKnowledgeLib デジタル版によれば、「着物の、袖口の下の袋のようになった部分。そで。」とあって、漢語の「袖」に相当するものである。

は句題の「成文」を直訳するものであるが、「血」については字義通りではなく、その色を表すものと解して「くれなゐふかき」という語が用いられる。ちなみに、「くれなゐふかき」という語は、『千里集』における二十八番と四十一番の歌にも見られる。二十八番と四十一番の句題と和歌はそれぞれ次の通りである。

句題：蓮開水上紅

和歌：あきちかくはちすひらくる水のうへはくれなゐふかき色にぞありける

句題：樹葉霜紅日

和歌：つねよりも秋のこのはにおくしものくれなゐふかくみゆるころかな

この二首の歌では、「くれなゐふかき」という語はいずれも、句題における「紅」の字を表すように用いられている。それを踏まえると、九十二番の歌において、「血」の色を表すものとして、「紅」の字に相当する「くれなゐふかき」という表現を用いているのは特に問題がないと言えるが、歌全体を見わたしてみると、表現上、句題の「血」の字を字義通りに翻案することを避けているという印象である。ここで留意したいのは、歌の初句である。句題をあらためて顧みてみると、「涙霑雙袖血成文」に詠まれる「涙」が血涙であることを明確に読み取ることができる。しかし、歌ではその血涙が「なくなみだ」として表される。なお、『千里集』成立以前の和歌表現において、素性法師の「血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ[18]」の如く、「血の涙」という歌語が見られ、ないわけではなかった。また、「なくなみだ」という語については、『万葉集』に見られるが、ここで留意したいのが、そもそも涙が泣くことを

[18]『古今和歌集』に収められる歌であるが、詠作時期が『千里集』（894 年）より早い。当該歌の左に「前太政大臣を白川のあたりに送りける夜よめる」という詞書が付される。詞書によれば、これは前太政大臣であった藤原良房が 872 年に歿した当時、彼のことを送葬して詠んだものである。（久曽神昇『古今和歌集成立論』（研究編）、風間書房、1961 年 10 月、384 頁）

表しているのであり、千里の歌では、限られた文字数で句題の血涙により即応する「血の涙」という歌語が使われず、その代わりに、「なくなみだ」という表現を用いている。そして、「紅」で血の色を表す。千里の歌に見られるこういった「血涙」の在り方に、まずは留意しておきたい。

さて、以上のような句題と和歌との表現上の対応関係を踏まえて、字面通りに和歌を理解しておくと、その意味は、目から流した血の涙が「こふるたもと」にかかって、深い紅の綾のように見えることだとなる。和歌は句題と同じく、極めて悲しい気持ちを表すと言えるが、「たもと」を修飾する「こふる」という新たに添加された語は、和歌に新しい趣向を加えることになっていると考えられる。まずは、「こふ」という語の字義を確認しておく。

・『角川古語大辞典』: 目の前にないものに心惹かれる。恋い慕う。ことに異性を思う場合に用いることが多い。上代では、人を対象にする場合は助詞「に」を受けるのが普通で、中古以降は一般に「を」を受けるようになった[19]。

・『古語大辞典（小学館）』: ①眼前にいない人や事物などに心ひかれ、慕う。②眼前の物をめでる。上代の「恋ふ」は、眼前にいない相手に逢いたいと思う意を表し、従って、「…を恋ふ」ではなく、「…に恋ふ」という形で用いられることが一般的であった。平安時代以降は、…を思慕するの意に変化したため、もっぱら「…を恋ふ」という形のみが用いられるようになった[20]。

・『岩波古語辞典（補訂版）』: ①ひとりの異性に気持ちも身もひかれる。②《比喩的に》慕う。なつかしむ[21]。

・『日本国語大辞典（小学館）』: ①人、土地、植物、季節などを思い慕う。また、め

[19] 岡見正雄、阪倉篤義『角川古語大辞典』（第二巻）（角川書店、1984 年 3 月、540 頁）
[20] 中田祝夫、和田利政、北原保雄『古語大辞典』（小学館、1989 年 4 月、646 頁）
[21] 大野晋、佐竹昭弘、前田金五郎『岩波古語辞典』（補訂版）（岩波書店、1990 年 2 月、525 頁）。

でいつくしむ。②異性（時には同性）に特別の愛情を感じて思い慕う。恋する。恋慕する[22]。

・『時代別国語大辞典　上代編』：思い慕う。眼前にないものに心惹かれることをいう。特に異性を思う場合に用いられることが多い[23]。

「こふ」という語は、恋愛感情を表すことを基本語義として、平安時代からは助詞「を」をうけるのが一般であり、目の前にない人に心惹かれて、恋しく思う気持ちを表すように用いられることが分かる。それを踏まえて、千里の歌における「こふるたもと」を解釈すれば、「離れたあの人のことを恋しく思う私の袂」となるであろうか。厳密に考えるならば、さらに他の用例に及んで、千里の歌に詠まれる「こふるたもと」という表現の意味を検討することが必要であるが、『千里集』以前の和歌には、「こふる」を「たもと」と結び付ける用例が見られず[24]、「こふるたもと」と類似した表現として、次のような一例が確認される。

<u>戀わたる　衣の袖</u>は　潮みちて　みるめかづかぬ　なみぞたちける

―『新撰万葉集』上巻　恋　一〇四番

---

[22] 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』（第二版）（小学館、2002年1月、185頁）

[23] 上代語辞典編集委員会『時代別国語大辞典　上代編』（三省堂、2017年2月、307頁）

[24] 千里の歌の他に、古典ライブラリーによれば、「こふるたもと」を詠むものとして、以下の歌がある。いずれも『千里集』以降の歌である。因みに、以下に記した歌は国歌大観の所載と私家集大成と重ねるものがある。その場合、国歌大観の所載のみを列挙する。（『国歌大観』1 巻-3、『拾遺和歌集』、1246 番、恵慶法師）、（『国歌大観』1 巻-14、『玉葉和歌集』、2302 番、藤原高光）、（『国歌大観』3 巻-56、『恵慶法師集』、72 番、恵慶法師）、（『国歌大観』3 巻-131、『拾玉集』、668 番、慈円）、（『国歌大観』4 巻-11、『隆信集』、932 番）、（『国歌大観』4 巻-5、『明日香井集和歌集』、1538 番、明日香井）（『国歌大観』5 巻-421、『源氏物語』「蓬生巻」、267 番、末摘花）、（『国歌大観』7 巻-43、『行宗集』、122 番、源行宗）、（『国歌大観』7 巻-100、『前権典厩集』（長綱）、137 番、藤原長綱）。また、『千里集』以前に「こふるそで」を詠む例もない、『千里集』以降、次のような例が見える。（『国歌大観』1 巻-11、『続古今和歌集』、1594 番、東三条院）、（『国歌大観』2 巻-15、『万代和歌集』、2429 番）、（『国歌大観』3 巻-76、『大斎院前の御集上巻』、221 番）、（『国歌大観』3 巻-100、『江帥集』、264 番、匡房）（『国歌大観』3 巻―117、『源三位頼政集』下、426 番）、（『国歌大観』5 巻―362、『平家物語（延慶本）異本歌』220 番、王昭君）（『国歌大観』9 巻-24、『うけらが花初編』、650 番）。

当該歌は『新撰万葉集』上巻の恋部に収められており、離れた男を恋しく思う女の悲しみを詠んだものである。千里詠における「こふるたもと」と類似した表現として、傍線部の「戀わたる衣の袖」は、「あの人のことを恋い慕い続ける私の衣の袖」と解釈される[25]。それを参考としつつ、千里の和歌全体の意味を解しておくと、「離れたあの人を恋しく思って、泣いて流した血の涙が私の袂にかかり、深い紅の綾のように見えることだ」となる。要するに、和歌の趣旨は、離別の後に、目の前にいない恋人を恋しく思うため、心に生じた極めて悲しい気持ちを表したものとなる。句題の方は単に極めて悲しい気持ちを表現したものと解せる。こうして比較すると、「こふる」という語は、歌全体に恋歌的な雰囲気を持たせつつ、悲しい気持ちを引き起こすための原因として新しく付け加えたと言える。では、この恋歌としての趣向は句題となった原拠詩とどのようなつながりがあるのか。ここで原拠詩を顧みて確認しておこう。

涙霑雙袖血成文、不為悲身為別君。

望鶴眼穿期海外、待烏頭白老江濆。

遙看逆浪愁飜雪、漸失征帆錯認雲。

欲識九回腸斷處、潯陽流水九條分。

―『元氏長慶集』巻十八「送致用」

九十二番歌の句題の出典は元稹が作った「送致用」という漢詩である。詩題に明らかなように、当該詩は元稹が致用を送別する際に詠んだものである[26]。致用は名を李景

[25] 半沢幹一、津田潔『対釈新撰万葉集』（勉誠出版、2015 年 2 月、722 頁）

[26] 松原朗『中国離別詩の成立』（研文社、2008 年 6 月、254 頁）によれば、「盛唐以降、送別詩の代表的な命題は「送」「送別」また「餞」となる」。そのため、詩題の「送致用」は致用を送別するという意である。

倹といい、元稹と親交がある。この詩を作った当時、元稹は江陵に流謫していた[27]。詩に描かれたのは同じく江陵に任職した李景倹がまもなくこの地を離れ、元稹が彼を見送る際の気持ちである。詩の主題は首聯に詠まれるように、目から血を流すほどの悲しみは、我が身の左遷のためであるわけではなく、君と別れるためである。首聯以降の部分はこの別れの悲しみをめぐって展開されていく。頷聯の「望鶴眼穿期海外、待烏頭白[28]老江濆」は、まもなく鶴のように去りゆく君が再び戻って来るのを待ち望むものの、江のほとりでずっと君のことを待っても待ち得ないだろう、という意味である。このように、句題とされた第一句に詠まれた目から血を流すほどの悲しみは、まもなく親友と別れることによって引き起こされたものであり、なお、その悲しみは離別際に、心の中に生じたこれから再会できない悲しみであることが読み取れる。頸聯の「遙看逆浪愁飜雪、漸失征帆錯認雲」と尾聯の「欲識九回腸斷處、潯陽流水九條分」はそれぞれこの離別によって起こされた視覚の混乱を描き、悲しみを強調する。こうして、原拠詩全体の内容を踏まえてあらためて句題を顧みると、そこに詠まれているのは、親友と離別する際の惜別の情であることが分かる。ところが、その句題に対して和歌に詠まれるのは離れた恋人を恋しく思う悲しみであり、思慕の情であり、句題とは趣を異にする。なお、和歌に詠まれる新たな趣向、即ち、血涙が袖を濡らすという表現によって、恋愛の情を表現するという趣向は中国の漢詩文には見られないものである。

中国の漢詩文では、前述のように、涙が袖を濡らすという表現は極めて少ない。また、「血涙」という語自体も恋愛表現として用いられるわけではない。「血涙」という語は中国の漢詩文を発端とするものである[29]。于永梅氏によれば、「血涙」は中国の漢

[27] 周相録『元稹集校注（中)』(上海古籍出版社、2011 年 12 月、560 頁)

[28] 前掲注 16 書によれば、烏頭白：烏頭変白。比喩不可能的事情（烏の頭が白くなる。あり得ない事のたとえ)。

[29]『日本国語大辞典』JapanKnowledgeLib デジタル版により、「血涙」は「『韓非子・和氏』に、王

詩文で、「死別などの極度の悲しみの場面に多く用いられる」ものであり、また、「政治や社会に大きな関心を持ち、動乱の世の中を嘆く男性の涙」であると指摘されている[30]。翻って、千里の歌に見られる血涙が袖を濡らすという表現、及びそれによって恋愛の情を表すという趣向は、日本の従来の詩歌とどのようなつながりがあるのか、この問題について次節で検討していく。

3. 九十二番歌と血涙が袖を濡らすという表現を用いる日本の従来の詩歌

日本の詩歌では、「血涙」は紅涙の形で用いられることがある。ちなみに、「紅涙」も中国の漢詩文を発端とする語である。中国の漢詩文では、「紅涙」は女人の涙に使用するのが一般の用法であり[31]、紅粧と深く関わった表現で、「血涙」と使い分けられていた[32]。しかし、日本の詩歌では、「血涙」と「紅涙」は特に区別なく用いられる[33]。そのため、以下では、『千里集』成立以前及び同時代の詩歌を対象に、血涙あるいは紅

に献じた玉璞がただの石と見なされた上、足切りの刑にあった和氏について「抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜、泣尽而継之以血」とあるのにもとづく。

[30] 于永梅「平安時代の漢詩における「血涙」「紅涙」の受容」(『和漢比較文学』第 31 号、 2003 年 8 月)

[31] 小島憲之「和習の問題」(『日本文学における漢語表現』、岩波書店、1988 年 8 月、43 頁)

[32] 前掲注 30。

[33] 日本の漢詩における「血涙」と「紅涙」については、前掲注 30 の于永梅氏は、日本の漢詩では、『新撰万葉集』以外において、「血涙」と「紅涙」と区別されずに詠まれると主張する。しかし、中野方子氏は『新撰万葉集』においても、「『紅涙』、『血涙』は特に区別されずに詠まれる」と述べる(『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』、笠間書院、2005 年 1 月、129 頁)。両氏の指摘の違いについて、本稿は中野方子氏の指摘に同じ立場に立つことにする。なぜかというと、于氏の論は、『新撰万葉集』における「紅」で表した涙が、中国六朝時代の閨怨詩における「紅涙」(紅い化粧が涙にくずされ、涙が紅く見えるという表現)から由来すると説く。ところが、『新撰万葉集』における「紅」で表した涙の用例として、于氏の論文には「含情泣血袖紅新」という例に言及しない。この用例では「紅」で表した涙は明らかに化粧に関わる紅涙ではなく、血涙のことだからである。つまり、日本の漢詩では、「血涙」と「紅涙」は区別されずに詠まれるという具合である。また、和歌における「血涙」と「紅涙」については、佐伯雅子氏は「用語として『血の涙』と『紅の涙』の区別は、明確に判断できない」と述べる(「王朝物語における『紅の涙』攷―『源氏物語』まで―」『論集源氏物語とその前後 5』、新典社、1994 年 5 月)。なお、持早百合氏も「和歌においては男性・女性の別なく用いられていた」と指摘する(「『紅の涙・血の涙』考」、『實踐國文學』第 29 号、1986 年 3 月)。

涙が袖を濡らすという表現について考察を展開し、千里の歌とのつながりを探してゆく。

まずは、日本の漢詩を見てみよう。日本の漢詩では、『千里集』以前、血（紅）涙が袖を濡らすという表現を用いる例は次の通りとなる[34]。傍線を付した箇所が当該表現を用いる句である。

①閨房怨緒惣無端、万事呑心不表肝。

胸火燃来誰敢滅、紅深袖涙不応干。

―『新撰万葉集』上　恋　一〇〇番

②千般怨殺厭吾人、何日相逢萬緒申。

歎息高低閨裏乱、含情泣血袖紅新。

―『新撰万葉集』上　恋　一〇三番

③落涙成波不可乾、千行流処袖紅斑。

平生昵近今都絶、寂寞閑居絕瑟弾。

―『新撰万葉集』上　恋　一〇四番

これらの詩は全部、『新撰万葉集』上巻の「恋」部に所収された漢詩である。『新撰

[34] 調査範囲は『懐風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『都氏文集』、『新撰万葉集』、『田氏家集』、『菅家文草』、『扶桑集』、『本朝文粋』である。そのうち、『菅家文草』、『扶桑集』、『本朝文粋』は成立時期が『千里集』以降であるが、そこに収められる漢詩には『千里集』より早いものがあるため、視野に収めて調査を行った。なお、『懐風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『都氏文集』、『新撰万葉集』、『田氏家集』、『扶桑集』に対する調査は続群書類従完成会刊行『群書類従』文筆部に拠る。『本朝文粋』と『菅家文草』に対する調査はそれぞれ『日本古典文学大系 69 懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』（小島憲之、岩波書店、1964 年 6 月）、『日本古典文学大系 72 菅家文草　菅家後集』（川口久雄、岩波書店、1966 年 10 月）に拠る。以上の漢詩集には、血（紅）涙が袖を濡らすという表現を用いる漢詩として、本文に取り上げられた例の他に、『新撰万葉集』下巻に「不飽良君自別離。初夜涙河堰無留。良歟我両袖染紅。怨気散雲散雨留。」（恋　238 番）という一例が見える。『新撰万葉集』下巻は 913 年に成立し、『千里集』以降のものである。本章が検討するのは千里の歌に見られる句題との違いと日本の従来の詩歌とのつながりである。そのため、『千里集』以降の例は本文で列挙しないことにする。

万葉集』は主に寛平御時後宮歌合や是貞親王家歌合から歌を取って、さらに、各歌の左に七言絶句の漢訳詩を付加した撰集であり、上下両巻に分かち、上巻は寛平五年（893 年）に成立し、菅原道真によって編纂された[35]。下巻は延喜十三年（913 年）、『千里集』以降の成立となる。恋心を詠むものとして、上巻は「恋」部、下巻は「思」部を設けており、両部立に詠まれる恋愛を大別すれば、「思」は逢う以前であり、「恋」は別れた後である[36]。したがって、上掲の『新撰万葉集』上巻の「恋」部に収められた①～③の漢詩は、恋人と別れた後の心情を主題とするものである。ちなみに、①、②の元となった和歌は次の通りとなる。③の元となった和歌は第二節で取り上げた『新撰万葉集』上巻の「恋」部における一〇四番歌である。

くれなゐの　色にはいでし　隠れぬの　下に通ひて　恋ひは死ぬとも

―一〇〇番　紀友則

つれもなき　人を待つとて　山彦の　こゑのするまで　嘆きつるかな

―一〇三番　読人しらず

これらの漢詩の元となった和歌には血（紅）涙が袖を濡らすという表現が見られず、菅原道真が『新撰万葉集』を編纂するにあたり、歌意に基づいて独自に付けたものである。

さて、①～③の漢詩を見てみよう。①は、閨で離れたあの人に恋焦がれて、会えないことを怨みつづけている。その思いを心の奥に呑み込んで、外には表さないようにしよう。でも、胸の火は燃えてばかりで、誰が消してくれるのであろう。涙に袖は深い紅色になり、きっと乾くことがないだろう、という意である。「紅深袖涙不応干」は

[35] 高野平『新撰万葉集に関する基礎的研究』（風間書房、1970 年 5 月、398 頁）
[36] 久曾神昇「新撰万葉集と寛平御時后宮歌合」（『文学』第 54 巻 2 号、1986 年 2 月）

離れた男を思慕し、会えないことを怨み悲しんで泣いて、その涙が袖を深い紅色に染めたという意の句となる。②の意味は、私に厭きて離れ去った人をひどく怨んでいる。いつの日に逢って万感の思いを訴えることができるだろうか。溜息をついては、心は閨で乱れる。その思いを心の内に抑えて目から血の涙を流して、拭う袖が鮮やかな紅色に染まることだ、という意である。「含情泣血袖紅新」は女が自分を捨てた男を怨むが、依然としてその男を思って、逢瀬を図ろうとする屈折した心情を表現した句となる。③は、止まらなく落ちる涙が波のようになり、乾くことができない。千行も流れて袖にかかり、紅色の斑のように見える。昔の親しみは今になってはまったく断絶してしまった。寂しいこの閨で琴を弾いて、孤独を紛らわすしかできないことだ、という意である。「千行流処袖紅斑」は男に見捨てられた悲しみ、孤独に流す涙が袖に流れ、袖を紅色の斑に染めるという意の句となる。これらの三首の詩はいずれも、恋人が離れた後の悲しい気持ちを詠んだものである。特に①と②の詩では、血（紅）涙が袖を濡らすという表現が、離れた恋人を恋しく思う悲しみを形容するように用いられる。このように見てくると、千里の歌に見られる血涙が袖を濡らすという表現、及びそれによって離れた恋人を恋しく思う悲しみを表すという趣向は、これらの『新撰万葉集』（上巻）における菅原道真が作った漢詩と趣を同じくすると言える。

次に、血（紅）涙が袖を濡らすという表現を用いる和歌に目を向けていこう。和歌では、血（紅）涙が袖を濡らすという表現を用いる例は次の通りとなる。但し、『千里集』以降の例は除外する[37]。

[37] 古典ライブラリーに拠れば、血（紅）涙が袖を濡らすという表現を用いる歌は、本論に取り上げられるもの以外に、次のような例が見える。いずれも『千里集』以降の歌である。因みに、以下に記した歌は国歌大観の所載と私家集大成と重ねるものがある。その場合、国歌大観の所載のみを列挙する。(『国歌大観』1巻-5、『金葉和歌集』、716番、琳賢法師)、(『国歌大観』1巻-13、『新後撰和歌集』、810 番、法皇御製)、(『国歌大観』1 巻-15、『続千載和歌集』、1049 番、式乾門院御匣)、(『国歌大観』1 巻-18、『新千載和歌集』、1063 番、良久親王)、(『国歌大観』1 巻-21、『新続和歌集』、1512番、平親清)、(『国歌大観』2巻-9、『後葉和歌集』、422番、神祇伯顕仲)、(『国歌大観』2 巻-15、『万代和歌集』、2320 番、真昭法師)、(『国歌大観』3 巻-71、『高遠集』、400 番、藤原高遠)、(『国歌大観』3 巻-81、『赤染衛門集』、268 番、赤染衛門)、(『国歌大観』3

番号	和歌	作品・部立	詠者	歌番号
①	紅のふりいでつつなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ	『古今集』・恋	紀貫之	598 番
②	紅に袖をのみこそ染めてけれ君をうらむる涙かかりて	『後撰集』・恋	よみ人知らず	810 番
③	くれなゐに涙しこくは緑なる袖も紅葉と見えましものを	『後撰集』・恋	よみ人知らず	812 番
④	くれなゐのなみだしこくはみどりいろのそでもみぢてもみえましものを	『伊勢集』・恋	伊勢	280 番
⑤	紅のふりでつつなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ	『貫之集』・恋	紀貫之	558 番
⑥	紅に袖ぞうつろふ恋しきや涙の川の色にはあるらん	『貫之集』・恋	紀貫之	614 番

これらの歌は、殆ど千里と同時代の貫之や伊勢などの歌である。これらの歌のうち、

巻-118、『重家集』、549 番、藤原重家)、(『国歌大観』3 巻-127、『聞書集』、118 番、西行)、(『国歌大観』3 巻-132、『壬二集』、2750 番、壬二)、(『国歌大観』3 巻-132、『壬二集』、3153 番、壬二)、(『国歌大観』3 巻-133、『拾遺愚草』、2825 番、藤原定家)、(『国歌大観』4 巻-45、『藤川五百首』、356 番、藤原為家)、(『国歌大観』5 巻-133、『山家五番歌合』、41 番、雅兼)、(『国歌大観』5 巻-244、『南朝五百番歌合』、615 番、弁内侍)、(『国歌大観』5 巻-419、『宇津保物語』(巻九)、482 番、忠康)、『国歌大観』5 巻-421、『源氏物語』、325 番、夕霧)、(『国歌大観』7 巻-63、『親宗集』、107 番、平親宗)、(『国歌大観』7 巻-67、『長秋草』、151 番、藤原俊成)、(『国歌大観』7 巻-113、『隣女集』、2343 番、飛鳥井雅有)、(『国歌大観』7 巻-122、『為理集』、214 番、藤原為理)、(『国歌大観』8 巻-10、『草根集』、6407 番、正徹)、(『国歌大観』8 巻-10、『草根集』、6595 番、正徹)(『国歌大観』8 巻-10、『草根集』、7557 番、正徹)、(『国歌大観』8 巻-17、『松下集』、2270 番、正広)、『国歌大観』8 巻-17、『松下集』、3049 番、正広)、(『国歌大観』8 巻-27、『碧玉集』、899 番、冷泉政為)。これらの歌はいずれも、『千里集』以降の歌人が詠んだものである。本章で検討するのは千里の歌と日本の従来の詩歌とのつながりである。したがって、『千里集』以降の歌例は本文で列挙しないことにする。但し、本文に取り上げた②の例は詠者が不明であるが、考察の厳密性を考慮するため、一応本文に取り上げることにする。

①と⑤、③と④は所収先が異なっているが、歌は同じものである。以下に、①②③⑥の歌を順次見ていく。

①は、報われない恋に苦しんで泣く紅の涙が、袂を色濃く染めると詠んだものである。②は、つれない恋人を恨んで流した紅の涙が袖を赤く染めたという意の歌である。③は、女が自分に求愛した男への返歌であり、男の贈歌は「紅に涙うつるときゝしをばなどいつはりとわが思けん」(『後撰集』　よみ人しらず　八一一番）である。返歌で言う紅の涙は男が女の冷淡に泣く涙を指しており、女の返歌の歌意は、あなたの涙がおっしゃったように、濃い紅色だったら、あなたに緑色の袖も紅葉のように見えるはずなのに、そう見えない、となり、男の懸想に応じようとしない気持ちを述べる。⑥は、恋しい思いのあまり流す涙に袖が赤く染まるという意の歌である。これらの歌は、全部、血（紅）涙が袖を濡らすという表現によって、さまざまな恋の苦しみを詠むものであり、恋愛の感情を表すという点で千里の歌に見られる趣向と同じであると言える。また、表現上、これらの歌では、「血涙」という語が直接的に詠まれるのではなく、「血」と同じ色である「紅」で涙の色を表しており、千里の歌も同様である。

さて、以上は「血涙が袖を濡らす」という例を見たものとなるが、「血涙」のみの用例についても見ておく。『万葉集』では、和歌の本文に「血涙」という語がなく、「血涙」と類似した表現として、漢文で書かれた題詞には「泣血」、「血泣」という二例が確認される。

①柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首[并短歌]

―『万葉集』　巻二　二〇七番

②昔者有娘子 字曰櫻兒也 于時有二壯子 共誂此娘而捐生挌〈競〉貪死相敵 於是娘子戲欷曰 従古来今未聞未見一女之身徃適二門矣 方今壯子之意有難和平 不如妾死相害永息 尓乃尋入林中懸樹經死 其兩壯子不敢哀慟血泣漣襟 各陳心緒作歌二首

―『万葉集』　巻十六　三七八六番

これらはいずれも哀傷に関わるものである。平安時代の和歌ではどうか。第二節で取り上げた素性法師の「血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ」という一首しか「血涙」が見られず、それ以外の歌においては、殆ど紅色の涙を用いている。即ち、和歌では、「血涙」を詠んだものは一例しかなく、その一例以外に、「血涙」と詠みたいところを、全部「血」と同じ色である「紅」で涙の色を表すということになる。このように見てくると、千里の歌に見られる「血涙」のあり方は、当時の和歌と同様の用法であると言える。前述した通り、「血涙」という語は中国の漢詩文を発端とするものであり、『奥義抄』によれば、和歌に詠まれた「血涙」も漢語に由来する語である。この語は漢語から和語へ取り入れられる過程で、「時代の推移と共に血なまぐさい表現が嫌」われ[38]、「『血の涙』を和歌の歌語と見なすことに対して違和感を覚え」た結果、「『血の涙』の〈紅の色〉に焦点を合わせる」ようになったと指摘されている[39]。それを踏まえると、千里の歌に見られる句題における血涙の「血」を字義通りに詠まず、「紅」でその色を表すという表現のあり方もそういった血涙の歌語としての和語化の過程にあったものと考えられる。

4. 終わりに

本稿は『千里集』における九十二番歌に注目し、句題と比較することによって、和歌に見られる句題との主題や表現の違いを探った。そして、それらの違いは日本の従来の詩歌とどのようなつながりがあるのかについて検討を加えてきた。その上で、歌

[38] 持早百合「『紅の涙・血の涙』考」(『實踐國文學』第 29 号、1986 年 3 月)
[39] ツベタナ・クリステワ『涙の詩学―王朝文化の詩的言語』(名古屋大学出版会、2001 年 3 月、71 頁)

に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘し、九十二番歌の作歌方法について、以下のような見解を得るに至った。

九十二番歌の句題は血涙が袖を濡らすという表現を用いて、親友と別れる際の悲しい惜別の情を表すものである。ところが、その句題に対して、九十二番歌に詠まれるのは離れた恋人を恋しく思う恋愛の情であり、句題とは趣を異にする。中国の漢詩文では、涙が袖を濡らすという表現を用いるものは極めて少なく、九十二番歌の句題が珍しい例であると言える。また、九十二番歌のように、血涙が袖を濡らすという表現によって、恋愛の情を表現するという趣向も中国の漢詩文には見られないものである。それに対して、日本の詩歌には血涙が袖を濡らすという表現が少なくない。『千里集』と同時代の詩歌において、この表現によって恋愛の情を表すものとしては、『新撰万葉集』（上巻）における菅原道真が作った漢詩や紀貫之、伊勢などの和歌が挙げられる。加えてまた、九十二番歌には、句題の「血涙」という語をありのままに用いず、「血」と同じ色である「紅」で涙の色を表す、という表現的特徴が見られる。当時において、漢語の「血涙」という語は、和語へ取り入れられる過程で、歌語として違和感を覚えるものであったため、和歌では「紅」でその色を表すようになったとされている。千里の歌に見られる「血涙」のあり方も、そういった歌語としての和語化の過程にあったものであると想定される。

これらの諸点に基づいて、九十二番歌の作歌方法を次のように捉えておく。すなわち、九十二番歌の句題について、千里はまず、中国の漢詩の中から、離別に関わる血涙が袖を濡らすという表現を含む詩句を選び、それを句題とする。そして、その句題をもとにして和歌を作る過程で、千里は句題にあった友との離別という状況を離れ、同種の表現を用いる九世紀当時の日本の詩歌の趣旨、即ち恋人との離別という状況に沿って改作する。また、表現面では、千里は句題にある漢語を、当時流通していた歌語と適合する形に変形して和歌に用いる。これらの作業によって詠まれた九十二番歌

は、千里が当時の日本の詩歌に対する嗜好や傾向によって、中国の漢詩句を選択、変容した産物とも言えるだろう。

ここで、九世紀和漢交渉の有り様について述べた渡辺秀夫氏の次の発言を想起しておこう。

> 九世紀後半以降、漢風の摂取は、中国文学の一方的な模倣的流入であることを次第に希薄化し、我が国側の内面の熟成によって受容の主体的、自覚的捉えなおしが進行してゆく[40]。

渡辺氏の指摘を顧みた時、『千里集』における九十二番歌には、こういった九世紀における和漢交渉の有り様が反映されているとも言えようか。つまり、『千里集』の歌は、漢詩句題を一方的に模倣するわけではなく、この九十二番歌から、以上のような和漢交渉の痕跡も見ることができるのであろう。

[40] 渡辺秀夫『平安朝文学と漢詩文世界』（勉誠社、1991 年 1 月、8 頁）

終　章

序章で確認したように、『大江千里集』に関する研究は、大きく二つの流れに分けられる。一つは、『大江千里集』に込められた千里の個人的な意図に関する研究であり、もう一つは、『大江千里集』の作歌方法に関する研究である。千里の個人的な意図に関する従来の研究では、その意図は彼の官位の不遇と『千里集』の内部という両者の間に限定して論じられてきた傾向がある。但し、『千里集』はあくまでも勅命を受けて、公的に編纂、献上された歌集である。したがって、千里の個人的な意図を考察する際に、官位の不遇などのような撰者自身の状況の他に、編纂の契機、時代状況などといった作品の外部に目を向けることも必要があろう。また、『千里集』の作歌方法については、長い間、句題を翻訳しただけに過ぎないと過少評価されてきた。但し、近年では、九世紀当時の和漢交渉という視点から、『千里集』の作歌方法を捉え直すという新しい研究動向が現れてきている。

そういった先行研究の問題点や新しい研究動向を踏まえて、本研究においても『千里集』に込められた千里の個人的な意図と『千里集』の作歌方法という二つの課題に取り組んできた。具体的には、『千里集』の序文、「述懐部」、「詠懐部」を主な研究対象とし、テキストに依拠した分析を行いつつ、そこに編纂の契機、撰者自身の身辺的な状況、あるいは時代状況といった、いわば作品外部に対する視点を導入することによって、『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察した。また、『千里集』の作歌方法の考察では、『千里集』の九十二番歌に注目した。すなわち、当該歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を顧みつつ、その作歌方法の具体化を試みた。各章の結論をあらためて振り返ってみれば、次のようになる。

第一章「『大江千里集』の成立意図―序文を端緒として―」では、『千里集』の来歴を伝える序文を取り上げ、特に、序文において当該歌集の編纂の契機と撰者の状況について言及した「古今」と「餘孽」という言葉に着目する。これらの言葉の解釈を端緒として、『千里集』の成立意図について検討した。『千里集』の成立契機と

なる宇多天皇の勅命にあった「古今」は、宇多天皇が行った和歌の芸術化への試みという方向に沿って考えてみた時、「古今」とは「古と今」、具体的に言えば、「古」は古い他者の和歌、「今」は千里の自作詠をそれぞれ指すと解釈することが可能であり、それらの歌を宇多天皇は千里に要請したと解されてくる。このような勅命に対して千里が応じたのは、古い漢詩句を踏まえて新たに和歌を詠むという形式であった。このような試みをあえて実行した千里の意図について、本稿では「餘孽」という語を手掛かりに検討を加えてきた。そこには、大江氏という儒門の一族に生まれながらも、昇進が兄弟より遅くれた千里の劣等感がうかがえる。そのような千里にとって、宇多天皇による新たな歌集の依頼は、昇進につながる絶好な機会としてあったのではないか。本研究ではそのような仮説のもとに、千里がその機会を逃さず、儒者を重視する宇多天皇に構想した通りに漢詩文の素養を示し、漢詩句と和歌を結びつけるという新しい趣向を披露し得た。『千里集』が和歌史の上で句題和歌という新たな形式を打ち出すことになった経緯には、このような事情が契機として働いていたとの見解を提示するに至った。

第二章「『大江千里集』の述懐部に関する考察―その主題をめぐって―」では、従来あまり注目されてこなかった「述懐部」を取り上げ、そこに収められた和歌と句題を分析することによって、千里の「所懐」を考察した。この「述懐部」に詠まれる「所懐」とは、千里が自分の内面を凝視することで輪郭を表してくる我が身、人生や世の中に対する認識、即ち、人生観や処世観であり、これらは感傷的な詠嘆と、超然たる態度を基調として吐露されている。また、「述懐部」には句題の趣旨から乖離する歌もあることに着目し、句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分が、千里の歌では払拭されていることを指摘した。果たして、千里はなぜ述懐歌を詠む際に、句題が持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭したのか。その理由について、本研究では、奈良時代から平安時代にかけて老荘思想が独善的と見做され、政治を掌

る立場の人々からは有害なものと否定されていたという歴史的状況に着目し、千里が句題の持つ老荘思想的な閑適の気分を歌から払拭したのは、当時、老荘思想が国家政治に害するものとして否定されていたからであるという時代状況を考慮してのことであったと結論づけた。

第三章「『大江千里集』の詠懐部に関する考察―その表現手法に着目して―」では、「詠懐部」に収められた歌の表現手法に着目し、千里の意図について検討を行なった。従来の研究では、『千里集』における「詠懐部」の歌については、主題上、集中的に不遇が詠まれていること、及び、漢詩文表現を有することが指摘されてきた。こういった先行研究を踏まえつつ、本研究では「詠懐部」の歌に詠まれる不遇は、概ね事物を介するかたちで導かれているという表現手法上の特徴を指摘した。具体的に言えば、千里は「詠懐部」では事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自分の姿を投影し、自分の不遇を間接的、婉曲的に表出するという手法を取った。千里はなぜこういった間接的、婉曲的な表現手法を用いて、不遇を述べるのか。実は、千里の生きた時代にあって、直接的な不遇の表出は詩宴、歌合などの公的な場では長く忌避されてきた。天皇に奉る召歌においても、自らの不遇を直接的に訴えたものは古今集時代以前には多くを見出すことはできず、基本的に間接的、婉曲的な形を用いて自らの不遇を訴えるとされている。これらのことを考慮すると、千里が「詠懐部」で間接的、婉曲的な手法を用いて不遇を述べるのは、当時支配的であった、直接的な不遇の表出を忌避するという配慮が働いたと結論づけた。

なお、第二章が「述懐部」に関する考察であるのに対して、第三章は「詠懐部」に関する考察となる。「述懐部」と「詠懐部」には共に、千里の「所懐」が込められているという想定のもとに本稿では論を展開してきた。ここでその両部立の関係について総括すれば、まず、「述懐部」に詠まれる千里の「所懐」とは彼の人生観や処世観であり、一方、「詠懐部」に詠まれる「所懐」とは、千里の不遇意識である。本

稿では両部立の主題を以上のように弁別することになるが、しかし、両部立が共に千里の「所懐」としてある以上、そこには通底する論理もあろう。すなわち、千里の人生観や処世観には不遇意識が底流していると推察される。不遇意識を抱く千里であるがゆえに、彼は自分の人生や世の中を詠嘆的、感傷的に捉え、固有の人生観や処世観として詠出することができたのではあるまいか。その一方で、千里は、不遇の状況にありながらも、悲嘆に沈むことなく、超然たる態度をもって自分自身の人生や世の中を観じるといった感傷を克服する対処をも打ち出している。そこには、不遇の境遇を乗り越えようとする千里の人物像も見えてくるだろう。

第四章「『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法」では、『千里集』の九十二番歌に注目する。当該歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘しつつ、その作歌方法を以下のような段階的なものとして導出した。

九十二番歌の句題は血涙が袖を濡らすという表現を用いて、親友と別れる際の悲しい惜別の情を表すものである。ところが、その句題に対して、九十二番歌に詠まれるのは離れた恋人を恋しく思う恋愛の情であり、句題とは趣を異にする。中国の漢詩文では、血涙が袖を濡らすという表現を用いるものは極めて少なく、九十二番歌の句題が珍しい例であると言える。また、九十二番歌のように、血涙が袖を濡らすという表現によって、恋愛の情を表現するという趣向も中国の漢詩文には見られないものである。それに対して、日本の詩歌には血涙が袖を濡らすという表現が少なくない。『千里集』と同時代の詩歌において、この表現によって恋愛の情を表すものとしては、『新撰万葉集』（上巻）における菅原道真が作った漢詩や紀貫之、伊勢などの和歌が挙げられる。加えてまた、九十二番歌には、句題の「血涙」という語をありのままに用いず、「血」と同じ色である「紅」で涙の色を表す、という表現的特徴が見られる。当時において、漢語の「血涙」という語は、和語へ取り入れられる過程で、歌語として違和感を覚えるものであったため、和歌では「紅」でその色

を表すようになったとされている。千里の歌に見られる「血涙」のあり方も、そういった歌語としての和語化の過程にあったものであると想定される。

これらの諸点に基づいて、九十二番歌の作歌方法を次のように捉えてきた。すなわち、九十二番歌の句題について、千里はまず、中国の漢詩の中から、離別に関わる血涙が袖を濡らすという表現を含む詩句を選び、それを句題とする。そして、その句題をもとにして和歌を作る過程で、千里は句題にあった友との離別という状況を離れ、同種の表現を用いる九世紀当時の日本の詩歌の趣旨、即ち恋人との離別という状況に沿って改作する。また、表現面では、千里は句題にある漢語を、当時流通していた歌語と適合する形に変形して和歌に用いる。これらの作業によって詠まれた九十二番歌は、千里が当時の日本の詩歌に対する嗜好や傾向によって、中国の漢詩句を選択、変容した産物とも言える。

さて、本研究では、従来の研究の流れを踏まえて、『千里集』に込められた千里の個人的な意図と『千里集』の作歌方法という二つの課題に取り組んできた。本研究の第一章から第三章にかけての論考は、『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察したものである。また、第四章は『千里集』の作歌方法を考察したものである。

第一章から第三章にかけての『千里集』に込められた千里の個人的な意図に関する考察を簡単に総括すれば、次のようになろう。

『千里集』は勅命を受けて、いわば公的に編纂し、献上された歌集である。しかし、そこには撰者千里の個人的な意図が込められている。その意図は、千里が自分の身の置かれた社会的な地位をめぐって、不遇を訴えたり、昇進を企図したりするというものもあれば、自分の内面に潜む人生観、処世観を吐露しようとしたものもある。但し、いずれの場合も、その背景には、千里による時代状況や政治状況に対する配慮が働いている。

また、第四章の『千里集』の作歌方法に関する考察では、一首の歌に視点を据えることで、『千里集』の歌の中には、漢詩句題を単に模倣するものとは別に、九世紀当時の日本の詩歌に対する嗜好や傾向によって、中国の漢詩句を選択、変容するといった和漢交渉の痕跡がうかがえるものもある、という見解を提示した。

以上が、『千里集』に込められた千里の個人的な意図と『千里集』の作歌方法について得た知見となる。本研究が、これまでの『千里集』の研究に対して少しでも貢献できれば幸いである。

参考文献

序章

・金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇（増補版）』（培風館、1955 年 6 月）
・藤原仲実『古今和歌集目録』（『群書類従』第十六輯・和歌部、続群書類従完成会、1934 年 4 月）
・黒板勝美『新訂増補国史大系第六十巻下　尊卑分脈　第四篇』（吉川弘文館、1967 年 1 月）
・『大江氏系図』（『続群書類従』第七輯下・系図部）
・藤原範兼『中古歌仙三十六人伝』（『群書類従』第五輯・伝部、続群書類従完成会、1932 年 10 月）
・大曽根章介『日本古典文学大辞典』（岩波書店、1984 年 1 月）
・島津忠夫、井上宗雄、有吉保、片桐洋一、久保田淳監修（『和歌文学大辞典』編集委員会、2014 年 12 月）
・小沢正夫『古今集の世界 増補版』（塙書房、1976 年 5 月）
・田中幹子「新古今歌人による『白氏文集』受容―『文集百首』から―」（『危機と文化：札幌大学文化学部文化学会紀要』第 9 号、2007 年 4 月）
・蔵中さやか『題詠に関する本文の研究』（おうふう、2001 年 1 月）
・柳川順子「『大江千里集』句題校勘記」（『広島女子大学国際文化学部紀要』第 12 号、2004 年 2 月）
・橋本不美男『王朝和歌:資料と論考』（笠間書院、1992 年 8 月）
・平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、2007 年 2 月）
・山岸徳平『和歌文学研究　山岸徳平著作集 II』（有精堂、1971 年 11 月）
・蔵中さやか「『大江千里集』の歌風」（『甲南女子大学大学院論叢』第 11 号、1989 年 11 月）
・本間洋一「句題和歌の世界」（『和歌文学の世界　第 15 集　論集〈題〉の和歌空間』、

笠間書院、1992 年 11 月）
・川村晃生「句題和歌と白氏文集」（『白居易研究講座（第三巻）』、勉誠社、1993 年 10 月）
・佐山済「古代の和歌と漢詩」（『岩波講座　日本文学史（第三巻）』、岩波書店、1959 年６月）
・津田潔『大江千里集』に於ける白詩の受容について」（『國學院雑誌』第 80 巻第 2 号、1979 年 2 月）
・半沢幹一「『句題和歌』における和歌―その評価の見直しのために」（『伝統と変容』ぺりかん社、2000 年 6 月）
・半沢幹一『「句題和歌」の漢和＜接触＞ノート』（共立女子大学総合文化研究所、2005 年 2 月）
・小池博明、半沢幹一「釈論大江千里集（一）～（十二）」（『長野工業高等専門学校紀要』51 号、2017 年 6 月、及び『共立女子大学文芸学部紀要』65 号、2019 年 3 月より連載中）
・能登敦子「『大江千里集』の方法」（『和漢比較文学』第 46 号、2011 年 2 月）
・山口博『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』（桜楓社、1973 年 1 月）
・吉川栄治「大江千里集小考―句題和歌の成立をめぐって-」（『国文学研究』第 66 号、1978 年 10 月）
・小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」（『和歌文学研究』第 76 号、1998 年 6 月）
・太田善之「『大江千里集』の歌学」（『学芸国語国文学』第 32 号、2000 年 3 月）
・柳川順子「大江千里における「句題和歌」制作の意図」（『広島女子大学国際文化学部紀要』第 13 号、2005 年 2 月）
・小山順子「漢詩文の受容と和歌独自の創造的機能―『大江千里集』所載句題和歌の享受から―」（錦仁編『中世文学と隣接諸学 6　中世詩歌の本質と連関』、竹林舎、

2012 年 4 月）
・諸橋轍次(著者)、鎌田正・米山寅太郎（修訂増補)『大漢和辞典』巻十一（大修館書店、2001 年 12 月）
・神谷かをる「『涙』のイメジャリ―万葉集から古今集へ―」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　十三』、和泉書院、1993 年 7 月）

第一章

・山口博『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』（桜楓社、1973 年 1 月）
・小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について（『和歌文学研究)』第 76 号、1998 年 6 月）
・柳川順子「大江千里における『句題和歌』制作の意図」(『広島女子大学国際文化学部紀要』第 13 号、2005 年２月）
・金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集：句題和歌· 千載佳句研究篇（増補版)』（培風館、1955 年６月）
・羅竹風『漢語大詞典』（上海辞書出版社、1986 年 4 月）
・平野由紀子・千里集輪読会『千里全釈』（風間書房、2007 年 2 月）
・日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』（岩波書店、1966 年 10 月）
・孫玉巧「遣唐使制廃止原因試析」(『咸寧学院学報』第 2 期、2003 年２月）
・中村佳文「『寛平内裏菊合』の方法―和歌表現の再評価―」（『国文学研究』第 158 号、2009 年 6 月）
・徳原茂実「宇多· 醍醐朝の歌召をめぐって」(『中古文学』第 26 号、1980 年 10 月）
・萩谷朴『平安朝歌合大成（一)』（同朋舎、1995 年 5 月）
・川口久雄『平安朝日本漢文学の研究（中)』（明治書院、1982 年 9 月）

・陳斐寧「『大江千里集』の序文から見た「内」と「外」」(『国際日本文学研究集会会議録』第 29 号、2006 年 3 月)
・坂倉貴子「序の性質 :『大江千里集』の場合」(『学芸古典文学』第 3 号、2010 年 3 月)
・[清]嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』第二冊(上海古籍出版社、2009 年 3 月)
・太極『碧山日録 1』(八木書店、2020 年 2 月)
・今井源衛『王朝の物語と漢詩文』(笠間書院、1990 年 2 月)
・目崎徳衛『国史大辞典』1 巻(吉川弘文館、1979 年 3 月)
・目崎徳衛『平安文化史論』(桜楓社、1968 年 11 月)
・『大江氏系図』(『続群書類従』第七輯下・系図部)
・黒板勝美『日本三代実録』後篇(吉川弘文館、1989 年 6 月)
・藤原仲実『古今和歌集目録』(『群書類従』第十六輯・和歌部、続群書類従完成会、1934 年 4 月)
・黒板勝美『新訂増補国史大系第六十巻下　尊卑分脈　第四篇』(吉川弘文館、1967 年 1 月)
・藤原範兼『中古歌仙三十六人伝』(『群書類従』第五輯・伝部、続群書類従完成会、1932 年 10 月)
・小島憲之「『古今集』への遠い道―九世紀漢風賛美時代の文学―」(『文学』第 53 巻 12 号、1985 年 12 月)
・滝川幸司「宇多朝の文壇」(『奈良大学紀要』第 30 号、2002 年 3 月)。
・黒板勝美『新訂増補国史大系』・第十巻『日本紀略』前篇(吉川弘文館、1965 年 5 月)
・大曽根章介『新日本古典文学大系・本朝文粋』(岩波書店、1992 年 5 月)
・塙保己一『続々群書類従』第五輯・記録部(続群書類聚完成会、1932 年 10 月)

第二章

・小島憲之『日本古典文学体系 69 懐風藻· 文華秀麗集· 本朝文粋』（岩波書房、1964 年 6 月）

・諸橋轍次（著者）、鎌田正・米山寅太郎（修訂増補）『大漢和辞典』巻十一（大修館書店、2001 年 12 月）

・〔日本〕遍照金剛、周維徳校點『文鏡秘府論』（人民文学出版社、1980 年 3 月）

・内田徹「述懐歌の形成」（『文藝と批評』第 6 巻 5 号、1987 年 2 月）

・木村尚志「述懐歌の歴史」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』第 13 号、2010 年 3 月）

・太田善之「『大江千里集』の歌学」（『学芸国語国文学』第 32 号、2000 年 3 月）

・大曽根章介「和漢比較文学の諸問題」（『和漢比較文学叢書―和漢比較文学研究の構想』、汲古書院、1986 年 3 月）

・岡村繫『新釈漢文大系第 106 巻 白氏文集（十）』（明治書院、2014 年 12 月）

・小川環樹『世界の名著 4 老子 荘子』（中央公論社、1978 年 7 月）

・小島憲之・新井栄藏『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』（岩波書店、1989 年 2 月）

・『日本国語大辞典』（第 2 版、JapanKnowledge デジタル版、小学館、2007 年）

・織田得能『織田得能著佛教大辭典』第二冊（名著普及会、1977 年 7 月）

・望月信亨『望月佛教大辭典』第三巻増訂版（世界聖典刊行協会、1954 年 5 月）

・羅竹風『漢語大詞典』（縮印本）中巻（漢語大詞典出版社、1997 年 4 月）

・羽矢辰夫「『無常・苦・非我』に関わる教説における苦の意味」（『創価大学人文論集』第 30 号、2018 年 3 月）

・雋雪艶『藤原定家「文集百首」の比較文学的研究』（汲古書院、2002 年 2 月）

・岡村繁『新釈漢文大系第 99 巻 白氏文集（三）』（明治書院、1988 年 7 月）

・藤岡忠実・徳原茂実『私家集注釈叢刊 14　躬恒集注釈』（貴重本刊行会、2003 年 11 月）
・唐木順三「はかなしといふ言葉」（『唐木順三全集・第 7 巻』、筑摩書房、1967 年 12 月）
・岡村繁『新釈漢文大系 107 白氏文集（十一）』（明治書院、2015 年 9 月）
・埋田重夫『白居易研究―閑適の詩想』（汲古書院、2006 年 8 月）
・大曾根章介「『兼済』と「独善」―隠逸思想の一考察」（『仏教文学研究』第 8 巻、1969 年 7 月）
・武内義雄「日本における老荘学」（『武内義雄全集　第 6 巻（諸子篇 1）』、角川書店、1979 年 1 月）

第三章

・藤井良雄「昭明『文選』における「詠懐」の成立について」（『福岡教育大学紀要』第 1 分冊 42 号、1993 年 2 月）
・山口博『王朝歌壇の研究―宇多・醍醐・朱雀朝篇』（桜楓社、1973 年 1 月）
・小野泰央「『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」（『和歌文学研究』第 76 号、1998 年 6 月）
・木村尚志「述懐歌の歴史」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』第 13 号、2010 年 3 月）
・平野由紀子･千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、2007 年 2 月）
・小町谷照彦『新日本古典文学大系 7　拾遺和歌集』（岩波書店、1990 年 1 月）
・田中智子「述懐歌の機能と類型表現：『毛詩』「鶴鳴」篇を踏まえた和歌を中心に」（『むらさき／紫式部学会』第 51 号、2014 年 12 月）

・久保田淳『和歌文学大系 62　玉吟集』（明治書院、2018 年 1 月）
・滝川幸司「宇多朝の文壇」（『奈良大学紀要』第 30 号、2002 年 3 月）
・野本瑠美氏「『久安百首』の「短歌」―長歌形式による述懐の方法―」（『島大国文』第 35 号、2015 年 3 月）
・徳原茂実 「宇多・醍醐朝の歌召をめぐって」（『中古文学』第 26 号、1980 年 10 月）
・峯岸義秋「歌合における述懐の歌」（『東北大学教養部文科紀要』第 1 号、1958 年 3 月）
・窪田空穂『古今和歌集評釈 下巻』（東京堂、1960 年 6 月）
・小野泰央「申文としての和歌―十世紀歌人の不遇感と表現―」（『東洋文化』第 94 号、2005 年 4 月）
・鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、2001 年 1 月）
・菊川恵三「和歌文学教育の試み（一）：万葉・古今の物と心」（『名古屋大学国語国文学』第 64 号、1989 年 7 月）

第四章

・金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇（増補版）』（培風館、1955 年 6 月）
・山岸徳平『和歌文学研究　山岸徳平著作集 II』（有精堂、1971 年 11 月）
・吉川栄治「大江千里集小考―句題和歌の成立をめぐって」（『国文学研究』第 66 号、1978 年 10 月）
・蔵中さやか「『大江千里集』の歌風」（『甲南女子大学大学院論叢』第 11 号、1989 年 11 月）
・本間洋一「句題和歌の世界」（『和歌文学の世界 第 15 集　論集〈題〉の和歌空間』、

笠間書院、1994 年 11 月）
・川村晃生「句題和歌と白氏文集」（『白居易研究講座（第三巻）』、勉誠社、1993 年 10 月）
・太田善之『大江千里集』の歌学」（『学芸国語国文学』第 32 号、2000 年 3 月）
・佐山済「古代の和歌と漢詩」（岩波講座『日本文学史』第三巻　古代　岩波書店　1959 年６月）
・津田潔「『大江千里集』に於ける白詩の受容について」（『國學院雑誌』第 80 巻 2 号、1979 年 2 月）
・半沢幹一「『句題和歌』における和歌―その評価の見直しのために」（『伝統と変容』、ぺりかん社、2000 年 6 月）
・小池博明、半沢幹一「釈論大江千里集（一）～（十二）」（『長野工業高等専門学校紀要』51 号、2017 年 6 月、及び『共立女子大学文芸学部紀要』65 号、2019 年 3 月より連載中）
・能登敦子「『大江千里集』の方法」（『和漢比較文学』第 46 号、2011 年 2 月）
・鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、2001 年 1 月）
・萩野了子「心物対応構造の変質と序詞―万葉集を中心に」（『国語と国文学』第 87 巻 2 号、2010 年 2 月）
・中村佳文「『寛平内裏菊合』の方法―和歌表現の再評価―」（『国文学研究』第 158 号、2009 年 6 月）
・神谷かをる「『涙』のイメジャリ―万葉集から古今集へ―」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　十三』、和泉書院、1993 年 7 月）
・陳至立『辞海』第七版（上海辞書出版社、2020 年 8 月）
・久曽神昇『古今和歌集成立論』（研究編）（風間書房、1961 年 10 月）
・岡見正雄、阪倉篤義『角川古語大辞典』（第二巻）（角川書店、1984 年 3 月）

・中田祝夫、和田利政、北原保雄『古語大辞典』（小学館、1989 年 4 月）
・大野晋、佐竹昭弘、前田金五郎『岩波古語辞典』（補訂版）（岩波書店、1990 年 2 月）
・日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』（第二版）（小学館、2002 年 1 月）
・上代語辞典編集委員会『時代別国語大辞典　上代編』（三省堂、2017 年 2 月）
・半沢幹一、津田潔『対釈新撰万葉集』（勉誠出版、2015 年 2 月）
・松原朗『中国離別詩の成立』（研文社、2008 年 6 月）
・周相録『元稹集校注（中）』（上海古籍出版社、2011 年 12 月）
・于永梅「平安時代の漢詩における「血涙」「紅涙」の受容」（『和漢比較文学』第 31 号、2003 年８月）
・小島憲之「和習の問題」（『日本文学における漢語表現』、岩波書店、1988 年 8 月）
・中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』（笠間書院、2005 年 1 月）
・佐伯雅子「王朝物語における『紅の涙』攷―『源氏物語』まで―」（『論集源氏物語とその前後 5』、新典社、1994 年 5 月）
・持早百合「『紅の涙・血の涙』考」（『實踐國文學』第 29 号、1986 年 3 月）
・高野平『新撰万葉集に関する基礎的研究』（風間書房、1970 年 5 月）
・久曾神昇「新撰万葉集と寛平御時后宮歌合」（『文学』第 54 巻 2 号、1986 年 2 月）
・ツベタナ・クリステワ『涙の詩学―王朝文化の詩的言語』（名古屋大学出版会、2001 年 3 月）
・渡辺秀夫『平安朝文学と漢詩文世界』（勉誠社、1991 年 1 月）